

登山の氣風を興作すべし

日本人の自然拜崇

日本は山嶽國なり、故に此國に生産したる民人は、平常其の雄魁にして且つ幽黯なる形容を親目し、又た風雨晦明、四時の變更萬狀なるを觀察し、自から山岳を以て神靈の窟宅となすの感想を涵養す。然れば畿内の比叡、愛宕、笠置、芳野、麻耶、七面、箕面等の諸山に於ける、東海道の猿投、本宮、七面、身延、富士、箱根、大山、筑波等の諸山に於ける、日光、榛名、妙義、淺間、戸隠、飯綱、御嶽、乘鞍、岩手、月山、羽黒、湯殿、岩木等の諸山に於ける、北陸道の白山、立山、妙高、彌彦等に於ける、山陰道の大山等に於ける、山陽道の書寫山等に於ける、南海道の高野、那智、龍門等に於ける、九州の彦山、温泉、阿蘇、霧島等に於ける、皆な神若くは佛を祀り、或は山伏、巡禮者の登山して之れを拜崇するは、是れ民人の山嶽國に生産成育せし故となす。特に火山は最も雄魁變幻に、自然の大活力を現示するを以て、民人の之れを拜崇する殊に熱熾に、其の富士、淺間、戸隠、飯綱、御嶽、乘鞍、日光、榛名、妙義、岩手、月山、羽黒、湯殿、岩木、白山、立山、妙高、彌彦

大山、彦山、温泉、阿蘇、霧島の大權現、明神若くは神社なる者、皆な火山を以て神佛の棲息場の如くに假定するが故のみ、(鄙著地理學講義、拔萃)



登山の氣風を興作すべし

武 甲 山

(△望ニ南東ヲ隔テ川平赤リヨ西ノ町野鹿小郡父秩國藏武)
す立秀りよ側外南東の地盆父秩 突米〇一三一―拔海
りあ觀外き如の山火熄し似類に越洋形其
ひ蔽をれ之て以を岩灰凝線輝てしに岩板礎は髓骨もごれ然
ふ蔽を岩灰凝線輝て以を岩灰石に更
強里二徑直でま麗山りよ町 里在に内地盆父秩は町野鹿小

(ル 據 = 誌 雜 學 地)



噴煙ノ山間淺

(象現ノ日四十月六年七十二治明)
(態狀ル ス進流テ以ヲ度速ノ里一付ニ間分一每煙噴)
(ル據ニ誌雜學地)

(五) 日本には流水の浸蝕激烈なる事

日本○の○地○形○幅○狭○く○丈○々○長○く○蜿○蜒○と○し○て○細○く○伸○張○し○而○し○て○峻○崇○た○る○山○脈○
は○海○岸○線○に○并○行○し○て○國○の○中○央○に○連○續○す○況○ん○や○火○山○力○多○大○な○る○が○故○に○皆○
拔○秀○俊○な○る○峯○頭○は○岫○然○聳○起○し○玉○筈○族○々○森○列○し○て○際○な○し○是○を○以○て○か○若○し○
夫○れ○天○魔○を○賃○し○來○り○神○斧○を○揮○ひ○て○日○本○國○土○の○上○よ○り○切○割○せ○し○ゆ○ん○か○其○
の○横○切○面○は○銳○尖○な○る○三○角○形○を○作○さ○ん○此○時○に○當○り○四○周○な○る○大○瀛○の○水○よ○り○
發○上○せ○る○多○量○の○水○蒸○氣○は○雨○と○な○り○霜○と○な○り○氷○雪○と○な○り○泉○と○な○り○澗○水○と○
な○り○河○流○と○な○り○以○て○三○角○形○の○頂○點○よ○り○急○激○な○る○斜○面○を○直○洞○し○て○下○り○來○
る○日○本○に○於○け○る○流○水○浸○蝕○の○激○烈○雄○快○な○る○固○よ○り○然○り○其○の○初○め○泉○水○聲○な○
き○に○似○既○に○し○て○幽○咽○微○か○に○音○あ○り○既○に○し○て○澗○々○既○に○し○て○溪○々○會○磐○石○に○
會○ふ○や○迂○回○し○て○下○り○漸○く○斜○面○の○急○劇○な○る○と○共○に○漸○く○其○の○速○力○を○増○進○し○
忽○ち○巨○巖○に○當○る○や○爲○め○に○止○め○ら○れ○て○進○行○し○得○ず○鬱○勃○憤○然○奮○躍○し○て○巖○に○
上○り○之○れ○を○剝○磨○し○去○り○勢○ひ○驅○逐○し○て○下○り○更○に○峭○然○た○る○巖○壁○に○當○る○や○激○
日本には流水の浸蝕激烈なる事

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百七十二

して飛雨となり、濺沫澗に滿ち、兼て内部の孔竅に浸入し、内外交、攻撃して、遂に彼の

於戲奇哉鬼橋奇鬼耶神耶將化兒海内異觀蹄一掃天台石梁亦徒爲吟
客夜投帝釋窟大獻屣夢夢纒支曉霧攀入急峽際怪嶂危巒貫翠園石門
重開雲吞吐波角牽掣倒垂枝忽看大壑中否塞飛來長流何處之寧知空
際通山脈百丈橫跨千尋谿萬古不撓穹隆勢雲根天矯逸蟠螭上生老樹
爲欄楯牛馬來往似坦夷下如大月生溟渤水蕩仙氛相爭馳縱有霖潦漂
山至洞然流去屹不移疑他老蚪奔駭觸山死鱗甲化石不絕離又疑天半
長虹飲谷夕靈淑固結凝不虧不然太古架橋梁始眞宰教民運巧思萍梗
嘗搜東方勝金洞庚申屈指推不知絕奇在目睫一條壓倒萬嶽巖寄語天
下烟霞客公論不是我言私不攀見嶽勿談美不渡鬼橋勿說奇

坂谷朝廬

てふ

備後國奴可郡帝釋 備後國福山町より五里二十町、若くは尾道町より六里十一町、藍山
村に在り 郡府中村に出で、村より北行し、二里、同郡木野山村に到り、更に

火山岩に於ける浸蝕

帝釋ノ鬼橋

一名神橋、又た雄橋、所謂雄橋は雄橋より帝釋川下流一里に在り、
鬼橋の之れを架て、
鬼神の之れを架て、
なる水力は噴然して、
此の石壁を浸蝕して、
山に架し、帝釋川を跨り、水面上より高サ七間餘に懸かるを看る。

の如きを刻出し、既にして奔馬の如く下り、到る處脆弱なる地皮を剝磨し來る、其の

(一) 火山岩に於ける浸蝕

の如き流水は先づ岩の表面を剝磨し、且つ其の多孔なるに乗じ、頻りに内部に入りて攻撃し、竟に彼の箱根、日光、鹽原の勝を造くり、榛名山中の奇巖(葛籠岩等)を彫鏤し、其の雄快なるは到底支那人、英吉利人等の其國に在りて目睹する能はざる所、特に豪放奇詭なるは、

耶馬溪記

巖戌寅遊嶺西過海、南望彦山於雲際、已覺其有異矣、既經二肥薩隅、還寓日本には流水の浸蝕激烈なる事

百七十三

火山岩の水蝕
と寫す所、筆
々生動、眞に
逼る、是れ山
陽にあらずん
ば能はざるも
の、山陽又た
句あり、「箕出
奇巖勢捷連。
挿天碧笋萬春
煙。一峰別起
形相類。山脈
知如竹迸鞭」
と、是れ亦た
善く火山岩の
水蝕と寫す

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百七十四

豊後隈邑。臘月五日。入豊前。遇一水北來。蓋發源彥山者。沿焉而東數十里。昏黑覺左右峰巒皆非凡。山溪相迫處。鑿山腹爲道。又穿屬取明。余買炬以入。遇屬。窺見月在溪水朝然。宿民家。翌大霧。待霽乃發。復沿溪東。愈東愈奇。群峰夾水攢竦。如春笋矗出。有土積石者。石挾土者。全石者。全石破裂成洞穴者。兩石相闢其一欲仆者。石數層累成夏雲狀者。而樹自石罅橫生。縱生倒生而上指叢生蔽石。如與石爭勢而欲勝之。石又自樹中奮躍而出。而石陰皆苔紫綠相間。或沒石半面。或沒全身。又如援樹攻石者。大抵峰勢石皴如畫。巨刻意圖。時窮冬。多老木葉脫。槎牙瘦古。皆倪黃筆法。而苔枯蹙蒼濕者。王叔明也。古人筆墨不吾欺也。至涉阪。憩孤店。店面石壁數丈。飛泉懸焉。仰則更有高峯。不知其幾十丈。余急釋所佩酒瓢。命婦之。窺突蕭然。會一獵師新獲豪猪。割而炙之。肪脆如水。連引數大白。又行。溪又數曲。隨峰勢上下。或激雷噴雪。或浮膏凝碧。峰影爲之或碎或全。似水妬山而亂其影也。至屈智林。溪稍開。有小村。過一橋。自此行溪北。開者益開。數十里。詣古城。正行寺寺主含公。余故人。疾余既久。余先說曰。君州山水大奇。含公曰。更有奇者。使

子目之。居二日。與含公南行。行田厓間。至仙人巖。巖石突立山頂。含公指示余。余不甚賞。其明又徑田厓。至羅漢寺。寺据山。鑿山作洞壑橋梁狀。安五百像。余復不甚賞。宿寺前逆旅。挑燈而談。余曰。山不得水。不生動。石不得樹。不蒼潤。所以余賞馬溪。而不賞仙巖。至於羅漢。則人工耳。然皆馬溪之支裔矣。且馬溪。溪山相迫。無田厓礙目。而其路坦夷。真可遊也。然爲二豐通道。過者慣看。况公等生長此土。宜不貳其奇也。余則再遊不可期。將復溯之以諦觀之。含公奮袂與偕。早發。過一水北出馬溪口。峰容樹色。忽覺迥別。自淺入深。自平入奇。沂前數曲者。一曲奇於一曲。比諸前遊。更可喜也。復至絕壁下。孤店。店主譙余面。驚曰。是前喫猪客也。有何幹。再來此耶。余曰。欲看山耳。曰。山有何好看。吾不禁子看也。遂席溪畔。與含公傾瓢一醉。宿山寺。明雨。借轎西還。山峰得雨。皆變幻作態。或前以爲一山者。分成數峰。如群仙駢肩。露其半身。凶松振鬣。鼓譟於雲中。又如廿五菩薩奏樂而至也。還至屈智林。含公慮吾酒盡。預戒家僮。馱樽於馬來。取醉。宿阿保村。翌歸寺。又三日辭去。踰海東歸。自海雲中。願望鎮西山岳。其屬豐前者。皆有別態。彥山其尤大者。耶馬山日本には流水の浸蝕激烈なる事

百七十五

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百七十六

脈水週蓋皆自彦山發故獨絕耳余足跡幾半海内弱冠東遊得妙義山以爲無雙今馬溪百里如妙義者不知幾十峰謂之海内第一或不誣也

頼山陽

の如きを穿鑿し水勢愈猛雄となり悍怒闢激するや其の

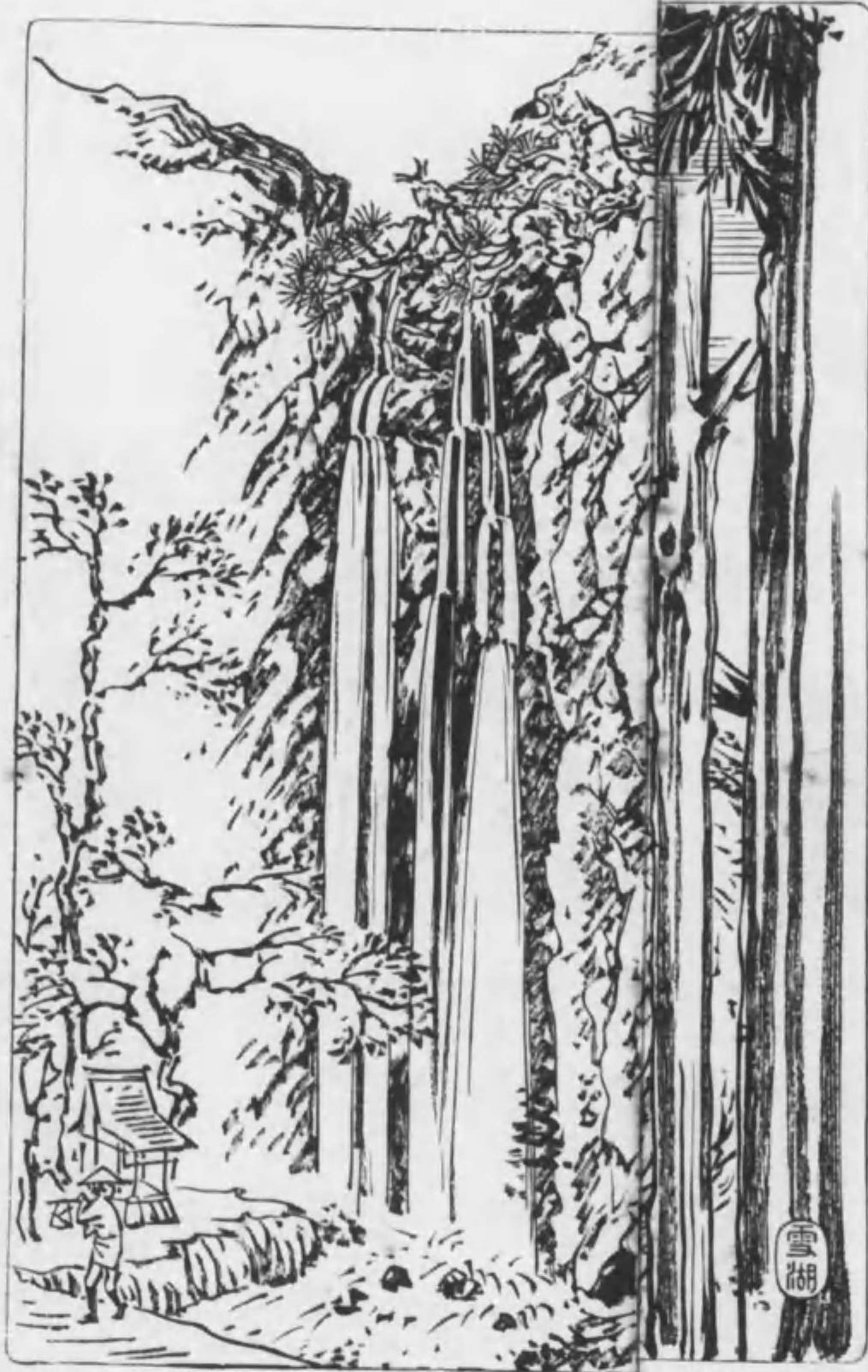
富士川

甲斐の富士川系に於ては、甲斐國南巨摩郡御坂より定期の下り船あり、即ち御坂(海拔二二七
米突六、沖積層地、より川流と共に南下し、早川の東流して此川に注
入する處まで、は水勢平々、悉く第三紀層地の間を流れて、又た村
田班々、時に峻急激湍に會ふに過ぎず、早川合流の處より以南は、河
下は、第三紀層地を穿鑿するも、極急激なるを以て、水勢亦た急劇
此村まで、三時三十分間程、南に凡八十三、七、米突八、第三紀層地、波木井より
寺まで、四分間程、南に凡八十三、七、米突八、第三紀層地、波木井より
山に去り、四十分間程、南に凡八十三、七、米突八、第三紀層地、波木井より
の如く、峻急激湍、岩上を跨り、漸く大山岩に會し、水勢澎湃、奔
瀉、岩象の奇麗、直に富士山頂と連絡する、北松野村(右角)に
到らんとして、岩は、山を越えて、右岸まで、延綿し、此所に六角林
の岩柱、松野村(右岸)に下れば、其の對岸に岩の窟、石安山岩、山は立
す、南松野村(右岸)に下れば、其の對岸に岩の窟、石安山岩、山は立
處に、上陸す、南部より此處まで、三時間程、御坂より六時三十分間程

花崗岩に於ける浸蝕

の如きを呈出す更に豪放雄快の一層々なるは、
(二) 花崗岩に於ける浸蝕

是れなり想ふ花崗岩は堅硬なるもの容易に浸蝕さるゝものにあらず、而



小野ノ瀧

(側左上途ル到ニ驛原須リヨ驛松上曾木) 岩崗花し發り山越風水溪尺六く全は樹明晶色水すと布瀑てり懸に崖斷因に蝕浸

花崗岩水蝕後の
蹕風跌宕なる處

かも猶ほ且つ流水の汪々滔々たるに當るべからず、竟に
みか^みかげには堅く見えたる岩かねも
みつにくたけて景色そゆるか
の如き状あり、然れども花崗岩や素と堅硬なる大丈夫漢、豈に徒らに流水
の勢威に屈伏する者ならんや、若し夫れ流水の勢威に浸蝕せられ、竟に推
けざるべからざるに到れば、自から自己の分條裂理に依りて大塊に摧け
了る、故に其の摧けたる痕跡や、蹕風跌宕堂々として大丈夫漢の本色あり、



花崗寺

岡崎城

(ス存チ礎遺ノ其モドレタシ壞崩時現ハ樓城各 處ノ生誕康家川徳ハ樓城ノ側左 町十三凡北ノ場車停時岡道鐵道海東)

るなと關公は在所の其 りに在上陵丘の岩成水るせ成組てし碎細の岩崗花は墟城
む收に中群雙を谷溪岩崗花の系河矧矢りよ上の礎遺ばせ臨登に墟城

處すなを游治少年(經義)丸若牛、處るたト咏と情の京領に裡花子燕上途の下東平業原在將中、處るげ矧を矢矧の征東尊武本日
處る在の寺字之是るたみ夢さる握と字の是(父祖の康家)康清川徳、處す臥てりなと食乞(吉秀)丸吉日、處つ討を兵利足貞義田新
る集に端眉く悉は亡與の代歴霸王來年百八千一、處るたひ戦と氏田織氏川徳、處るたひ戦と氏川今氏川徳、處の生誕康家川徳

方 非

昇仙峽

なる胸宇と壯にす
 若し夫れ霜紅秋に
 横はり木葉紅水愈
 らし黄と益め水愈
 岩愈と露はれて益
 入るを覺ゆに神に
 此勝は在來甚だ江
 湖に知られず在り
 ても東京近に在り
 須らく一遊すべし

雙立し、「天狗岩」亦た頭上に突起す、漸く北行せば天保十一年此
 路を開鑿せし農夫園右衛門の碑あり、面に結髮豐頰なる肥大漢の半
 身像を刻し、上は林鶴の贊詞あり、「石門」に入る、兩岩相抱擁し
 て門となし危欲崩れんとするの觀あり、此處、連雨岩右に突起し、
 「登仙峽」左に孤壁立し、兩壁夾立し、中に一線の天光を露ほし、岩苔な
 花崗岩、松樹其の碑より亂生し、岩に根を敷かせ、雪白の花崗岩水
 中、奇警跌宕、碑より少しく北せば、「浮石」あり、雪白の花崗岩水
 中に横臥するもの、石の傍に「雪虹瀑」あり、雪霏へり虹湧き其稱に
 背かす、瀑時、磨崖碑、石を磨して文を刻す、雪霏へり虹湧き其稱に
 べからず、所謂「磨崖碑」は是れ、既に「昇仙橋」に上り、「仙娥
 瀑」を觀る、花崗岩屏立し、瀑其上より瀉き下り、銀繩條落、半ば瀑
 に出づる所、雄快一番、人目と壯にす（仙娥瀑より北御嶽金櫻神
 社に詣る紀事は第五十八頁、金峯山）の表中に詳なり、參照すべし

の如き即ち是れ其他流水浸蝕の激烈なる

たにかはの音には夢もむすはしを

ねさめの床と誰れなつくらん

近衛攝政家照公

と味みたる寐覺ノ床(挿書中に詳なり)の如き、木曾の懸橋所在の如き、皆な
 流水の花崗岩を浸蝕して鑿通せしもの、眞に觀て以て壯とするに足る、而
 して流水の此等花崗岩の罅隙に入り、冬間其の結氷するや、結氷の際、水の
 分子膨脹すると共に、岩は罅隙より摧け、其響轟々として猶は萬斛の爆裂
 弾を一時に發霍するが如しとは、木曾、甲州山民の往々説く所、是れ亦た花

花崗岩内部罅隙の結氷

木曾地方の景象

崗岩が其の臨終の豪爽なる處、蓋し木曾地方景象の雄大壯嚴なる所謂

そも、木曾の路は大むね岨のかけちさかしき山坂にてはのかな
 る溪わひ奥深き山里のみにて見上ぐれば千尋のさき岸青く聳えて
 空をかくし見下せば一筋の溪河白く漲りて玉をちらしあるは木こ
 りの通ふ細路嶺よりみねにめぐりあるは筏を載るす流溪よりたに
 にいり魂を驚かす水の響心をさむからしむる巖の形かの唐人の山
 は人の面よりおこり雲は馬の頭にそひて生ずといひけむもかゝる
 所にこそはと思合はさるしかのみならず年經し林に風おこりて鳥
 の聲ものさびしく古びたる石に霧まとひて瀧の音かそけきなど言
 盡すべくもあらず

かゝるけしきは世に大かた稀なるをこの道をゆきかふ人は常にな
 れてさる所としも思ひたらず豊後の野馬溪上野の妙義山などをこ
 どにふれてことごとくしくいひ出でつゝ二なきものに思ふもすくな
 からずそれはた世の常の所にはあらざめれどたとへば扇などにか
 日本には流水の浸蝕激烈なる事

山陽は火山岩
の水蝕を寫し
拙堂は花崗岩

日本には流水の浸蝕激烈なる事
百八十
きたらむ繪ともいふべくやこのさまはそのすがた大にしてたけ
たかき屏風横長き巻物をみるこゝちなむせらるゝ心ある人は誰も
しりたらむことながら事の序に驚すになむ。
てふもの、全く流水の花崗岩大塊を浸蝕する所に在り。

下岐蘇川記

天保丁酉四月、余竣役、與兩藩士俱自江戸還、取路東山、舍輿步行、旁探名
勝、五月四日、下十三嶺、晚宿伏見驛、連日崎嶇、經涉山間、頗疲、至奴輩把鎗
荷鎧者、或堵痛不能起、且聞水路之勝熟矣、因謀賃舟下岐蘇川、至桑名、殆
二十里、不一日而達、乃召舟人戒之、翌日夙起、趨水濱、求舟、舟人家在前岸樹
林中、閉戶未起、阻以灘聲喧騰、累呼不達、唇焦舌燥、久之乃應、與其兒、艤舟
來迎、日已加長、乃發、舟狹長、薄板爲之、呼爲鷓鴣、兒纔十三歲耳、父在艤、兒
在艫、各持櫂、操縱甚習、驟急舟走、兩崖巒巒、一時皆搖、當前所見、倏忽在後、
唯見岸行山走、而不覺舟移、山皆石身、載土、松爲之髮、而紅杜鵑、粧點於其
間、腥血如滴、又處々有水簾懸焉、綏綏灑灑、墜於潭石上、石皆奇狀、羅列兩

の水蝕を寫す
岩各、別、景
各、異、而し
て其の眞を寫
すや一、共に
一代の辭宗、
文采後世に表
はすに足るも
の

岸、或特立若柱、或折裂若門、或若渴驥飲澗、或若臥牛橫道、五色陸離相間、
皴率作大小斧劈、間有作荷葉披麻者、灑波浪以出、交替去來、不暇應接、蓋
講詭變幻中、帶清秀深穩之態、非荆關之筆、倪黃之手、不能狀也、雖僕隸輩
不解山水之趣者、皆連呼奇不絕聲、忽遇一大巖、屹立水中、舟殆觸之、少誤
則塵粉矣、衆懼而默、舟人笑振柁避之、輒掠巖角過、如此者數處、未嘗差絲
毫、但經巖際、波激舟舞、飛沫撲人、衣袂盡濕、回視僕從、各握兩把汗、殆無人
色、舟人甚間暇、從容吹煙而坐、視上流、船併力挽上者、難易懸絕、已而離峽、
漸平遠、犬山城露於翠微上、粉壁鮮明、衆望見歡然、比至城下、又有暗礁、齧
舟、若然欲裂、衆復相顧、躍然過此以往、漁舟相望、歌唱互答、衆心始降矣、蓋
始發抵此、爲陸行半日之程、不一餉時而至、其快可知矣、嘗讀盛廣之鄴道
元所記、誇稱江水迅急之狀、至唐李白述其意云、千里江陵一日還、平生竊
疑以爲文人虛談、今過此際、始知其不誣也、但舟行甚迅、不能徐翫、峽中之
勝、爲可恨已、又三里、抵笠松、鳴鐘方報已、登憩岸上店、目猶眩、仰見屋椽動
搖不定、暝坐良久、乃止、進饌脆美、媚口、此行跋涉山谷、蔬食彌旬、獲之以解
日本には流水の浸蝕激烈なる事

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百八十二

菜飯已復入舟岸愈濶水愈緩險阻已遠無復可觀枕藉而臥風方逆舟人用力撐撐甚勞楫聲喧聒使人煩寃午下稍得風便揚帆復走衆乃睡熟比醒達於桑名日尙高謝遣舟人登陸而行至四日市宿焉自伏見至此殆爲二日半路程道上行見家家插菖蒲彩旗翩然飄風衆在行旅倥傯涉日殆忘月日至是乃知屬端午節不圖今日舟行爲吊屈之舉抑亦奇矣且舟凌危險布帆無恙免爲汨羅之鬼不亦厚幸乎蓋天下之至奇至美者每在於艱難危險之地不獨山水之勝也求之者比於入虎穴探龍頰危而後有所獲矣余於是乎有感焉未可以語千金之子也姑記之以示苦學勵行之人

齋藤拙堂

花崗岩の瀑布は
銀河の如し

且つや花崗岩たる多くは白色に雲母石英長石角閃石の各結晶より組織せるを以て瀑布の之れに衝るや

砂川にて白く長し誠に銀河と云ふべき(河内名所圖會)

花崗岩溪と月

てふ天ノ川(河内)の如きを造くり宛として銀河の懸くるが如く水晶簾を斜に垂るゝに似會秋月の皎然として浮び出づるや之れに映じて熒々た

るもの更に反射して一層々の清輝を添へ所謂

名月のかつらや浮木あまの川(河内天ノ川)

自慶

やま白しまことに月の御影石(攝津御影山)

枝靜

花崗岩溪と梅花
月ヶ瀬の梅花

の觀を現じ來る況んや此の如きの月光矢矧(參河)の花崗岩溪谷を照らして其の千軍萬馬の古戰場に映じ笠置山(山城)の花崗岩峽に入りて元弘帝蒙塵の故趾に輝き湊川(攝津)兩岸の花崗岩沙に反射し嗚呼忠臣墓臺の花崗岩に反射するに到りては其の踔厲跌宕なる眞に言ふべからず獨り月のみならんや梅花も亦た然り若し夫れ溪流一道花崗岩を穿鑿し來り梅樹懸崖峭壁の間に綺錯し榎枿横斜花影倒まに水に照し花や玲瓏水や晶明宛として萬玉を累積するが如し梅花の絶勝たる月ヶ瀬(大和)の如き實に是れ若し夫れ月ヶ瀬の梅花月と映發するや

時將二更月色清朝步抵眞福寺枝枝帶月玲瓏透徹影盡横斜寶釧玉釵錯落滿地水流其下鏘然有聲覺非人境傍岸西行前望月瀬水清如寒玉深月影燈作銀鱗而兩山之花倒懸其上隱約可見一棹中流山水俱動吾日本には流水の浸蝕激烈なる事

百八十三

日本には流水の浸蝕激烈なる事

平生之願至是酬矣

となり雪と映發するや、

丹崖碧巖悉化爲白玉堆。花亦加素彩。如粉傅何郎之面。其美更增一俯一仰。入目皓然。獨溪光益碧。作縹玉色耳。梅溪之清於是焉極矣。古人論梅。謂讓雪三分白。然雪以白勝。梅以艶勝。各有佳趣。

齋藤拙堂

となり月雪と相合せて映發するや、

山雲篩白界斜陽。萬玉斂容如讓光。與雪相爭應不屑。待他月姊闢明妝。

張氏紅蘭

となる。而かも梅花を映發するもの。豈に獨り月と雪とのみならんや。溪は花崗岩なるを以て燦然たり。水は花崗岩を穿鑿するを以て清冽なり。品明なり。梅月雪を全体より大に映發せしむるは、主として花崗岩に在り。月ヶ瀬の梅花を以て勝絶する偶爾にあらず。若し夫れ所在の地勢愈急劇となり。遂に九十度前後に到るや。流水は即ち瀑布と爲り。怒噴直下すること百尺。花崗岩屏を穿ちて來り。爲めに萬斛の雪を運びて天より擲ち下すが如

月ヶ瀬の梅花に勝絶する偶爾にあらず

百八十四

齋藤拙堂

く、白光閃々、忽ちにして其の瀧壺に下るや、花崗岩亦た此所より突出して水を承け、水岩に激して逆上し、飛沫百道、玉瑩珠跳するの壯觀に到りては、花崗岩に依らずんば遂に看るべからず、其の

みつの色たゞしら雪と見ゆるかな

皇后宮太夫顯房

誰れさらしけんぬのひきの瀧壺津

壽角

たき壺は銀の鹽やみつすし

てよ小野の瀧挿畫中に詳なり。仙娥瀧第七十八頁、昇仙峽の頂中に詳なり。の如き是れ既にして此岩の流水に浸蝕せられ、竟に粉碎となるや、其の成素たる雲母、石英、長石、角閃石は各個分離して、下流所在に雪の如き白砂を撒布し、青松其間に點綴して所謂白沙青松の活畫圖を描き出し、中國瀨戸内諸島の美を添へ來る要するに流水浸蝕の神韻は花崗岩に在り。第三百五頁より第六十一頁に到る、花崗岩の山嶽と參照すべし。其の

(三) 石灰岩に於ける浸蝕

に到りては、日本に水蒸氣の多量なるが故、地下の泉流も亦た多量、而して

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百八十五

花崗岩と白砂青松
石灰岩に於ける浸蝕

石灰中の炭酸は此の泉流中に溶解して、其の特性たる絶大の浸蝕力を逞ふし、爲めに石灰岩は内部に在りて自から溶解し、洞窟を鑿ちて深山中に奇怪を倍す。想ふ石灰岩の洞窟や、大概は口狭くして内寛く、身を側て洞門に入り、五躰を伏して蛇行すれば、漸く大に漸く寛く、燭を擧げて凝視するに、虛朗玲瓏、洞頂、洞底、石鐘、乳、萬千株、或は森然として上より倒まに垂れ、或は蠶乎として下より豎立し（所謂「底鐘」）、巨なる者、細き者、長き者、縮まる者、鋭き者、上下相迎へ、或は未だ合せざる者あり、或は僅に合したるも未だ合所の細き者あり、或は合すること業既に久しく合所の太まりて一柱と化成せる者あり、其他石灰の洞壁に沈澱する者、磊落踈厲、踞りて虎の如く、獅子の如く、立ちて人に似、佛に似、燭火に近き者は鮮紅色、稍遠き者は雪白色、遠き者は藍靛色をなし、光彩多變、火を挑みて四周を照せば、萬株の石鐘乳、底鐘、石鐘柱は悉く純紅色と變じ、壯麗陸離、恍として水晶殿中、若くは不夜城裡に入るが如く、恰かも聴く、泉流の淋鈴として遙に自然の音楽を奏するを、人をして杳然として仙寰の遠からざるを覺えしむ、宜べなり、其の

秩父八観音
二札地
内所
ノ胎
岩内潜
窟

出流
ノ
岩窟

天ノ岩戸

武蔵秩父郡影森村の西北に在り、石灰岩の洞窟にして、洞門入りて、洞内漸く寛く、燭を擧げて凝視するに、虚朗玲瓏、洞頂、洞底、石鐘、乳、萬千株、或は森然として上より倒まに垂れ、或は蠶乎として下より豎立し（所謂「底鐘」）、巨なる者、細き者、長き者、縮まる者、鋭き者、上下相迎へ、或は未だ合せざる者あり、或は僅に合したるも未だ合所の細き者あり、或は合すること業既に久しく合所の太まりて一柱と化成せる者あり、其他石灰の洞壁に沈澱する者、磊落踈厲、踞りて虎の如く、獅子の如く、立ちて人に似、佛に似、燭火に近き者は鮮紅色、稍遠き者は雪白色、遠き者は藍靛色をなし、光彩多變、火を挑みて四周を照せば、萬株の石鐘乳、底鐘、石鐘柱は悉く純紅色と變じ、壯麗陸離、恍として水晶殿中、若くは不夜城裡に入るが如く、恰かも聴く、泉流の淋鈴として遙に自然の音楽を奏するを、人をして杳然として仙寰の遠からざるを覺えしむ、宜べなり、其の

日本には流水の浸蝕激烈なる事

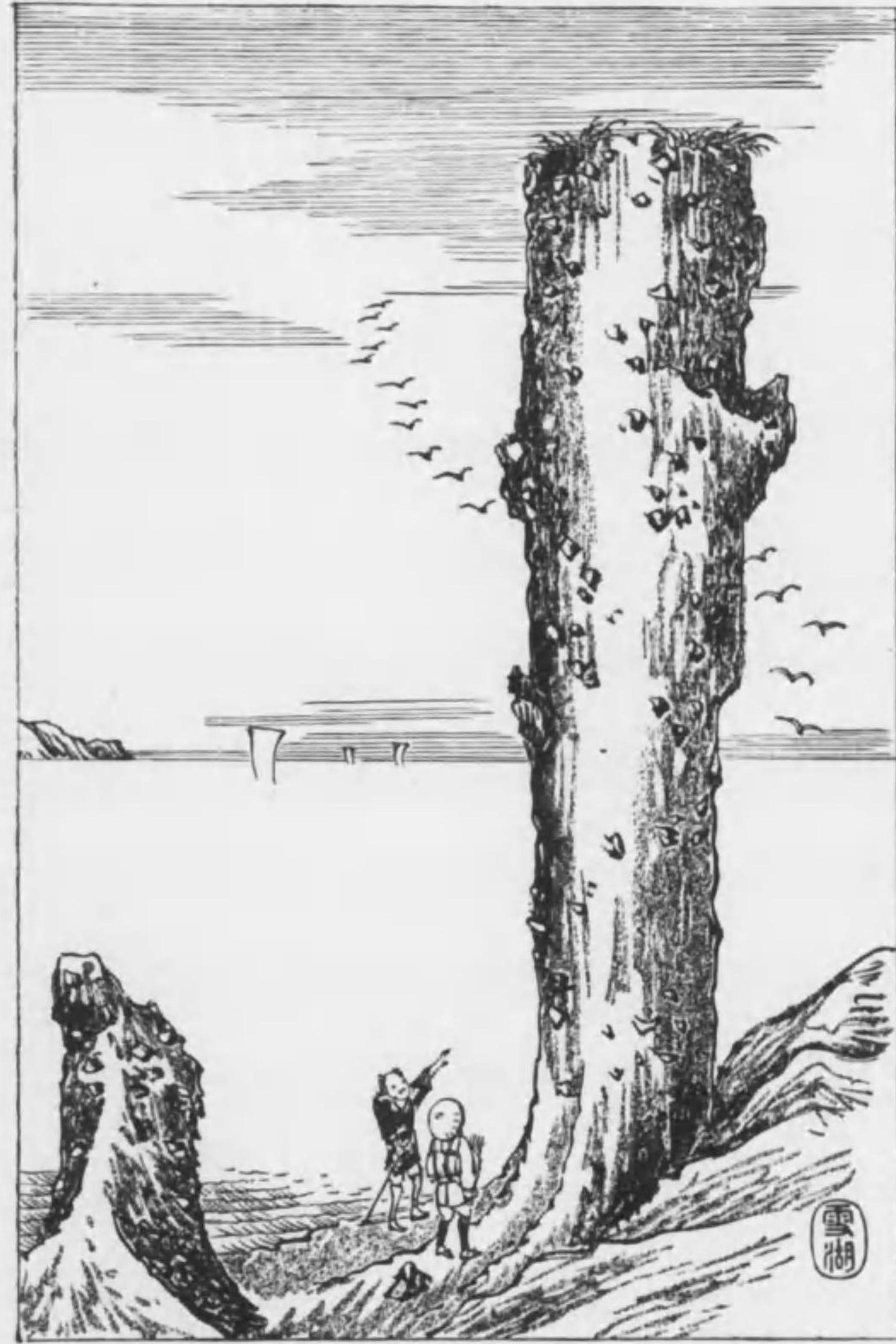
修験道の秘所、
役ノ行者が密法
を修したる處、
弘法大師の護窟
洞など云へるは
石灰の洞窟なり
地下の流水及び
地上の流水石灰
岩を穿鑿する現
象及び痕跡

各岩の浸蝕
に伴へる雜
多の結果
日本の大瀑布

の如き、皆な神を祀り佛を安置することを、其他古來山伏が修験道の秘所
と唱へ、役ノ行者が密法を修したる處と傳へ、弘法大師の護窟洞など云へ
る洞窟も、其の所謂奥妙を窮め神靈を發けば、石灰岩の溶解して鑿ちたる
もの十に七八、其他地下の流水、突爾と石灰岩壁の中途より外に洞出する
こと、宛然酒を盛れる樽の栓を抜きたるが如きの觀あるものあり、地上の
流水、此岩を穿鑿し、爲めに兩岸峭然、垂直線状をなし、其面平滑、猶ほ木板を
拉して新に鉋し、鉋して琢磨幾回せる如き狀をなすものあり、皆な奇觀。
火山岩花崗岩石灰岩に於ける流水浸蝕の結果、奇警雄快なるのみならず、
(四) 各岩の浸蝕に伴へる雜多の結果
亦た然り、想ふに流水浸蝕の結果は、日本の景象に美、奇、大を添ふもの、其の
火山岩を浸蝕して怒噴飛下せる日光の華嚴裏見等の諸瀧、下野、角岩を浸
蝕して雷轟雨暴し、一大角岩亦た下より之れを承けて散沫珠玉を亂撒せ
る養老ノ瀧、美濃、直立二百七十五米突、東、西の二瀑布と相駢びて古生紀層
の岩石を穿鑿し、齊しく同一の瀧壺に條落する大臺ヶ原山中の中ノ瀧(大

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百八十九



柱 泥

(浦坂濱郡井坂國前越)

他其、氣蒸水るせ帶携の風海、風海、分水 餘尺十五ナ高の柱
す成化と柱るな怪語の此に竟り因に蝕浸の般諸部外部内

奇巖
石門
深溪
流水の浸蝕
に伴へる他
の現象
天界の虹と流上
の虹

日本には流水の浸蝕激烈なる事
和・澎湃として班岩を穿鑿し來り、九天の雨潦一時に渦ぎ下るに似雄大莊
嚴「日本第一」の稱ある那智ノ瀧紀伊第三紀層岩を穿鑿し其音奔霆の如く
激町の外に返響する龍門ノ瀧大隅の如き日本の所謂大瀑布なるもの即
ち是れ其他流水浸蝕の奇抜なる結果には岩船越の岩船河内交野郡巖船
村高サ六米突餘長サ十五米突、船に似たる巨岩葛城山中なる久米ノ石橋
河内石川郡平石村幅一米突長サ二米突半の巨岩面に橋板の如きもの四
枚ありの如き奇巖多摩川上流武藏川合參河北設樂郡三輪村川合、豐川の
上流に在り、切通と俗稱す高サ四十四米突右側門柱に洞在り、鐘坂丹波、明
智光秀の城墟傍近の石門五串溪陸前猿橋甲斐、泥八町(紀伊)山伏谷美作、
津山川の穿鑿せしもの左岸に地蔵巖あり、豪溪備中の如き深溪あり、其の
五) 流水の浸蝕に伴へる他の現象
に到りては、小虹の起るあり、溪聲の大なるあり、岩石の磊落瑰奇なるあり、
若し夫れ雲行勃々、風に驅られて奔騰し、山背に衝りて少しく停り、電光此
間より一閃して雷聲般々、須臾に風止みて雨粒垂直線的に下り、倏忽にし



五剣山
峰全五剣山
高深風影四米
何分深影四米
尾池洞陽

山 劍 五
(町入りより村禮半部木三國峻讀 山栗八名一)
す成化で「五」謂所れらせ蝕浸に等水雨、氣太の岩山火るせ在存に上の岩園花
す壞崩(東北)一の劍五曉拂日廿際の雨大る至に日一廿リ、日一十月五年一十緒元



對馬ノ海岸

西岸の石岩は頁岩にあらずらば砂岩なり 風は西北多し 宗助の廟は小茂田村に建つ 小茂田神社と號し 縣社なり 西岸の石岩は頁岩にあらずらば砂岩なり 風は西北多し 宗助の廟は小茂田村に建つ 小茂田神社と號し 縣社なり

溪聲

流水と岩石の狀

て萬丈の彩橋雲雨を破りて現はれ、一端は高嶺の絶頂に架して一端は溪下の水を飲み其間幾多の小山嶽を杭となし、睥睨一空、雲雨之れを看敢て敵せずして寂然避け去るもの實に虹にあらずや、而かも虹の天界に現はる一回に一個若くは二個に止る、流上の虹に到りては然らず、

瀧の中より虹數十條起り錦を織れるがとく誠に見事なり大隅龍門ノ瀧てふ如く、懸瀑澗々碎雨をなす處若くは流水亂石と闘ひ、噴沫四迸、飛洶跳梁する邊日光會反映するや、七色嬌麗處々に小虹を吐き、遂に天界の虹と相應じて、大量小量上下數重、倚立互に配對す、是れ絶愛するに足るもの。溪聲に到りては、日本の溪谷は浸蝕の激烈なるが故に、兩岸峭然斗崖側立、爲めに流水音響の震動線は恣に外に放散するを得ず、音響峽内に凝結するが上に、峭然たる斗崖に反響し、兼て石に觸れ巖と擊ち、正響反響相發し相應じ、加ふるに日本の陸面は傾斜急劇に、且つや水蒸氣の多量なるを以て、溪聲は愈益大となり、自然の大音楽を奏するを聽く。岩石は浸蝕の激烈なるが爲めに、千變萬幻し、且つや水力の猛劇なる、能く

日本には流水の浸蝕激烈なる事

「辨慶の携へ來りたる石」、「天狗の持ち來りたる岩」

湖水の浸蝕

竹生島

日本には流水の浸蝕激烈なる事
百九十二
巨大の岩石を山中より下流に運搬し、里人の辨慶の携へ來りたる石、天狗の持ち來りたる岩など稱ふるもの多くは是れ想ふ石、水に頼りて或は平大となり、尖峭となり、或は横臥し、直立し、或は龍盤し、虎躍し、或は岸に臨みて流を探り、水に浸して半ば露はれ、或は碎石滾々として蕩漾し、沙脚兼蝕の間に隠見し、石の氣韻、水を得て茲に初めて生動す、要するに流水の浸蝕に伴へる他の現象や、亦た頻りに日本國の景象に美を倍し、奇を添ふもの既に流水の浸蝕を云ふ、是に到りて

(六) 湖水の浸蝕

を叙述せんか、湖水は面積素と小、故に風一たび蓬々として起り、波浪を振ふに當りては、其の振ふべき範圍小なるが故に、波浪個々は却て猛となり、大となり、咆哮洶湧、沿岸地質の脆弱なる部分を浸蝕す、琵琶湖の如き之れに注入する諸河流の渣滓泥土に因り、沿岸に新土壤を沖積すること多し、雖も時に亦た沿岸の土壤を浸蝕することあり、竹生島は、蓋し太古に於ける陸地の古趾、堅硬なる花崗岩より構造さるゝを以て、湖水は輒ち浸蝕

海水の浸蝕

し得ず、石壁森然、以て今日に残留する所因、
竹生島のそばに小島あり、これほもどさきに生ぜし島なり、又まゝ子島ともいふ、勢田川の下流に黒津の大日山といふあり、此小島はむかし竹生島かけてここにどいまりし山といふ故に、毎年三月三日島つなぎといふ事あり、廻七十五間水面より高さ九間六寸、又ここに島つなぎ松あり、近江名所圖會
と、口碑宛然地勢の現象と相適ふ、太古琵琶湖の沿岸を浸蝕せしこと推知すべきのみ、其の

(七) 海水の浸蝕

に到りても亦た然り、日本の海岸は多雨多風、水蒸氣多量なるが上に、風激し、濤亂れ、亂濤と海洋中の鹽分とは、外部より内部より沿岸地質の脆弱なる部分を浸蝕し、岩石爲めに崩墜するや、風や、濤や、鹽分や、共に此の崩墜せる岩石を驅り來り驅り去りて、削器となし、浸蝕力更に一層、或は奇礁を基峙せしめ、或は脆絶なる海角を刻出し、或は怪巖を紛錯せしめ、或は洞窟を

日本には流水の浸蝕激烈なる事

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百九十四

鑿ち或は石門を闢く、洋客の日本の海岸を咏するあり、

“ Where sombre pines and feathery bamboos joined

In constant contrast, ever green; and peeps

Adown the sheer face of the jutting crag,

Where blue-green waters lapped among the rocks,

Swishing with sea weed, and the hollow caves

Resounded with the tide;” — Rev. A. Lloyd.

ど、此の如きの句、日本の海岸を看ずんば、竟に發し得ざるもの、更に洋客の長崎の風物を嘖ふあり、

“ When morning dawned a glorious scene displayed

Its coloured splendours to the trotters' view;

That land-locked haven a wondrous picture made,

For three miles stretching out in shimmering blue,

Within its circling belt of hills embayed,

With creeks, and coves, and cranklings not a few;

So some old voyagers who were on board

It seemed good's as a Scandinavian fiord.” — A. Miall.

ど、獨り瓊浦の「十八灣」のみならず、九州の西海岸や、犬牙鋸齒の如き彎曲を彫鏤し、恰好たる諸威の「^{ノルディ}ノルド」其の

孤洞如秋月、海口霧始空、扁舟直穿過、似欲向蟾宮、(山水奇觀)

てふ

坊ノ津

薩摩川邊部の西南、坊ノ岬西南位に斗出する處、一大石門の海上に兀立するあり、「秋月洞」に在る港灣たり、此處沿岸出入多し、此處到る處海水浸蝕の痕跡歴々徴すべし、景物跌宕、眞に奇觀たり。

の奇觀を造くり、景物到る處、跌宕其他對馬の海岸も亦た然り(挿畫中に詳なり)、四國に到りては、伊豫の佐田岬、長嘴海中に延曳する九里、其の極西端遙に九州の地藏岬、豊後と相應對する處、太古紀層の堅緻なる岩柱、轟々として幾個となく海上に森立し、怒潮佐賀ノ關海峡より闖入して、益、柱を刮削し、眞個に日本の偉觀をなす、其の土佐の

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百九十五

龍串

土佐幡多郡三崎村 三崎村の沿岸、男体、女体二山の下の「布引石」「竹石」「龍門」「仙人」

陸上に遺存せる
海水浸蝕の奇蹟

の如き奇蹟亂立縦横斜亦た海水浸蝕の好模本たり其他觀念窟(紀伊友ケ島熊野の海岸紀伊「岩門」若狹遠敷郡外面濱の海中高サ海上より八米突半東西二門あり大門小門と稱す)辨財天ノ窟相模江ノ島夫婦石(伊勢二見ヶ浦挿畫中に詳なり)三尊窟伊豆下田港の西南手石浦の岬上に在り窟大にして舟を入るべし最奥の石壁上に彌陀三尊來迎の像を刻す錦浦伊豆熱海の近南鉦懸岩(後志奥尻島挿畫中に在り)冬島の海岸(日高挿畫中に詳なり)の如き皆な海水浸蝕の奇蹟
獨り海上のみならず陸上にも亦た海水浸蝕の奇蹟遺存せるあり即ち末ノ松山(陸中挿畫中に詳なり)の如き太古洋海に沿ひたる際亦た海水に浸蝕されたるも後陸面増大し土地の昇騰して太平洋の水遠く東に退きたる痕跡は今日古歌と地文學に徴して之れを證左し得るのみならず波打峠を越ゆる者皆な低徊して崖上の溝痕を揣摩し時に介殼の化石を拾ひ

行々輒ち太古瀕海の當時を想起せしむ

之れを要するに日本の國土たる内陸の水海洋の水共に其の浸蝕劇烈なるが爲め地裂け山開き危峯削られ怪巖蟠り石門闢き飛瀑下り鬼窟穿ち島嶼起り懸崖洗はれ鼻灣屈折し長嘴短角凸兀斗出し瑰偉峻峭變幻詭曲を極盡す眞に日本の絶特其の挿畫中なる越前濱坂浦の泥柱は内陸流水の浸蝕して刮削する所夫の舟人の拜崇せる北海道神威岬端の「神威岩」は海水の浸蝕して彫鏤する所

忍路高島不可企歌棄磯谷嶺可矣(奥嶺越兒頗如玉。瓊瑤唱出追分曲)一唱二唱皆悲涼不知何聲通我耶
傳云昔者廷尉源義經昵蝦夷一酋長之女不告別而往滿洲女追到神威海角不及恨望廷尉之船頭身慟哭呪曰和人之船載婦女過此則覆沒矣遂化為石後人崇石名神威巖神威者夷語猶曰神從是木州之船不復載婦女而入于海角以東忍路高島在角東歌棄磯谷在角西追分之曲故云德川氏之末織部正親正繼爲箱船奉行慨然曰生育植養者天道也豈有天孫之裔不可殖於蝦夷之理哉乃獻大艦滿載婦女放巨砲而過神威海角木州人移住蝦夷內地者始于此

日本には流水の浸蝕激烈なる事

日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す

絶代の大作、曠世の傑品を新創せんと欲せば、日本國土絶特のもの、即ち水蒸氣、火山、流水の浸蝕に寄託するを要す

(六) 日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す

島帝國の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士にして、寂焉として草木と併び朽ちんと欲せば止む、而かも雄大卓落たる技倆を揮灑し、絶代の大作、曠世の傑品を新創せんと欲するか、須らく日本國土絶特のものに寄託せんことを要す。天桃白李、嫩綠軟紅、佳は則ち佳、何々の三景、何々の八景、愛すべきは則ち愛すべし、而かも是れ未だ諸君子が滿腔の心血を澀ぐに足らざるもの、諸君子が滿腔の心血を澀ぐに足るは、彼の水蒸氣に在り、活火山、熄火山、火山岩に在り、流水の激烈なる浸蝕に在り、日本水蒸氣の變幻開闔や、千態萬狀森羅せる景象悉く其間に隱見出沒す、眞成に造化の太秘を探らんとし、大極の至妙を悟らんと欲せば、水蒸氣の變幻開闔に依らずんば到底能はざる所、萬化を冥合する實に此の一氣より來る、諸君子何ぞ之れに依らざる、其の活火山、熄火山、火山岩も亦た然り、自然の大活力を認識し、高邁雄

日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す

百九十九



物事に滯礙しな



靜中亦忙あり



獨り寒業と守る



境道なるも憂如

雪 湖 生 畫
矧 川 生 題

百九十八

拔の心懷を寄托せんと欲せば、遂に之れに頼らざるべからず。流水漫蝕力の激烈、是れ我を恢弘し我を豪爽たらしむ、苟くも此の水蒸氣を寫し、此の火山を刻み、此の流水を描かんとする者、豈に庸々醒睡の徒の爲し能ふ所ならんや、諸君子にして志墮ち節摧け、唯々として俗と俯仰し、平山凡水の間に満足せんとするか、此の造化の日本に厚賚する所を如何せんとする。且つ夫れ諸君子一たび北海道に遊ばんことを要す、想ひ看る、寒冷海流(親潮)東より來り、温暖海流(黒潮)の支派、對馬海流(西)より到り、兩々の相撞撃するや、水蒸氣飛噴して、白神岬頭(渡島)に凝結し、雲霧四合、其上より岬頭の峯尖高く半天に孤聳する處、其のカモイコタン(後志)の絶壁三四百尺、朔風蓬蓬として滿洲より吹き當り、亂濤奔馬の如く壁下に迫りて、碎沫鎮路に飛濺し、瀛笛長嘯、鐵車黒煙を噴きて、墜道に入る處、其のツッポッコブ(石狩)の上、彌茫六十里、石狩の大江注々として、其間に曲折し、田疇墟落秩々として、畫くが如く、新開地の活氣鬱勃たるを映出する處、皆な諸君子が心懷を寄托するに足れり、特に心懷を寄托するに足るは、其の原人時代の景象、是れ

北海道に一游すべし

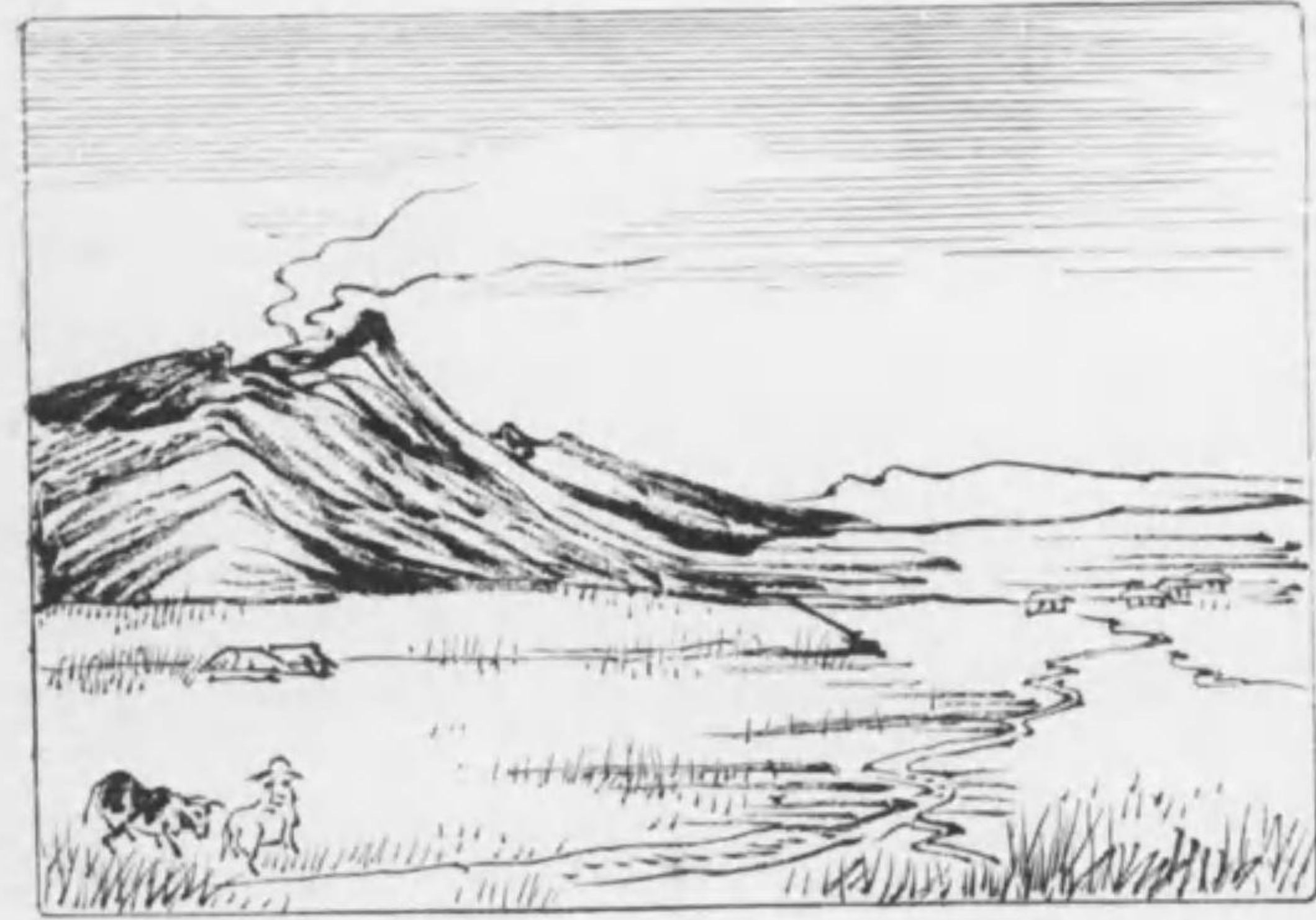
原人時代の景象



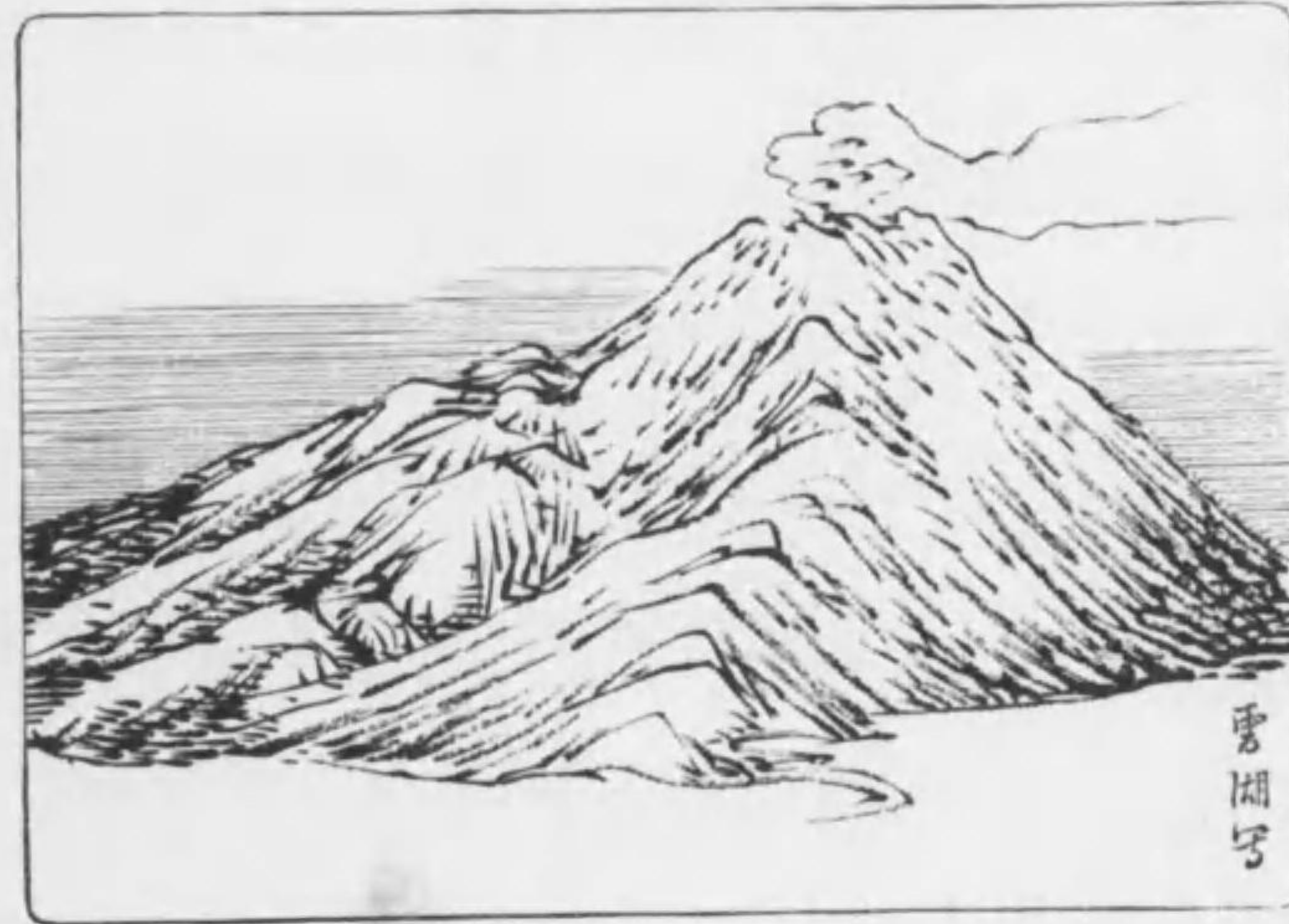
士 富 妻 吾

(ム望リヨ 巖大妻吾國代岩)

(町七十南東ノ山經切一 士富小稱俗 山管尖名一)
突米百五徑短 突米十八百五徑長 りあ口火舊るな形圓楕
りせなを形鉢摺は面内 し低に部北西く高に部東は壁口火
すらな群だ未は代時の火噴る、りよ山安石類概大山全
(カ據ニ誌雜し地)



樽 前 山
 (△ 望 = 北西リヨ原曠牧小苦國振騰)
 (リナ詳 = 頁七十七第)



淺 間 山
 (△ 望 = 北リヨ原分追國濃信)
 (リナ詳 = 頁八十八第)

樺太島の風景

臺灣島及び山東半島

なり、北海道自然の景象や、假裝せず、矯飾せず、鬱々萬古實に化工の有の儘を開展す、絶代の大作、曠世の傑品、豈に此間に發せざらんや。

既に日本江山の洵美を盡述す、是に到り感に禁へざるものあり、始め皇天の洵美なる國土を日本民族に賜與するや、更に今日より大なるものあり、余嘗行天下、察其各土之風、如平安、水清山秀、風景極爲佳麗、而人心纖尚、無大國之風、浪華則俗、江戸則粗、皆不慊人意、窃思莫如我郷之樂、余阿波人也、郷爲三谷、倚山成邑、谷邃峯秀、老木千章、蒼翠蔚然、凌青霄、殆都會之所未有、平生以此自負、及航北海、覽雄城大樽間等山川、則爽然自失、及閱島内諸處、益覺其勝出人意料。

岡本章庵

てふ夫の樺太島を失ひたる即ち是れ、然れども我皇の版圖にして臺灣島に擴張せば、熱帶圈裡の景象は新に日本の風景中に加入し來り、兼て山東半島にして我皇の版圖中に納まらんか、山東半島は、支那人が古往今來、岱宗と仰望する泰山の在る處、乃ち新山河の雲煙水光を描き出し、日本風景論の材料を膨大して、改刷重版し、以て更に風懷の高士、彫刻家、畫師、詞客、文

日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す

富士山と「岱宗」
となすべし

「臺灣富士」
「山東富士」

日本の文人詞客畫師彫刻家風懐の高士に寄語す 二百二
人の一大衆を博せんか料り知る我が富士山を岱宗となし千島富士千島
チャチャノポリ蝦夷富士膽振後方羊蹄山津輕富士岩木山南部富士岩
手山吾妻富士岩代吾妻山堂中一名小富士山榛名富士榛名山堂の最
高點鎌倉富士相模屏風山の傍伊豆富士伊豆加茂郡大室山八丈富士
八丈島西山一名甌峯近江富士近江三上山都富士比叡山有馬富士攝
津有馬郡尼寺村角山播磨富士播磨明石町と三木町間のメカウ山伯耆
富士伯耆大山安藝富士安藝廣島市傍近讃岐富士讃岐飯ノ山小富士
伊豫興居島筑紫富士筑前志摩郡可也山里稱親山豊後富士豊後由布
嶽薩摩富士開聞嶽と共に臺灣の最高峰玉山は宛如我が富士山に形似
するを以て臺灣富士と轉名し山東省の泰山は山東富士と變稱し齊しく
我皇の版圖中に在りて富士山の名稱を冒さしめんことを日本の文人詞
客畫師彫刻家風懐の高士は是に到りて一新改觀先人に超越するの大作
傑品を創作せずして可ならんや何物の拘儒か復た帝掬崑崙雪置之扶桑
東突兀五千仞芙蓉挿碧空と唱ふ者筆を擱くに當りて意氣千秋

日本風景の保護

江山の多様な美を
人の審美心を過
此の原力を残
啓するは日本
の人文啓發と
一般

名所舊跡の破壊
は歴史觀念の聯
合と破壊す

(七) 日本風景の保護

此の江山の多様な美なる生植の多種なる是れ日本人の審美心を過去現在未
來に涵養する原力たり此の原力にして殘賊せられんか日本未來の人文
啓發を殘賊するど同一一般而かも近年來人情醇薄只管目前の小利小功に
汲々とし竟に遙遠の大事宏圖を遺却し或は森林を濫伐し或は名木神
木を斬り或は花竹を薪となし或は古城斷礎を毀ち或は道祖神の石碣を
橋梁に用ひ或は湖水を涸乾し或は鶴類を捕獲し盡くし(維新後松島の松
樹を伐りて木材となし東京忍ヶ岡の櫻樹を斬りて印材となし物を喰ふ
とて奈良春日神社の鹿を絶えさんとし文明開化の世に無用の長物なり
とて東京芝増上寺に放火せし者の類は近年來少しく改悛したりと雖も
以て日本の風景を殘賊する若干且つや名所舊跡の破壊は歴史觀念の
聯合を破壊し國を擧げて赤裸々たらしめんとす日本の社會は日本未來
の人文を愈啓發せん爲め益日本の風景を保護するに力めざるべからず

日本風景の保護

日本風景の保護

名所圖會類に到りても亦た然り、想ふ名所圖會なるもの、過去に於て人々に旅行を奨誘し、山水の間に優遊するの好風尙を勾引したる感化や著大、而して今日に當るも憑據するに足るもの多し、是れ固より棄つべからず、

みやき野の萩や小鹿のつまならん花さきしより聲も色なる

さま／＼に心そとむる宮城野のはなのいろ／＼蟲の聲／＼

宮城野の風まぢ詫るはきか枝に露をかそへてやどる月かけ

あき萩の下葉の露も色つきてうつらなくなる宮城の／＼はら

衰いかに草はの露のこほらん秋風たちぬみやき野のはら

鹿の音もむしもさま／＼聲たえて露かれはてぬ宮城野の原

と古歌に咏み、玉露金風、蟲聲萩花、千古の韻事を留めたる宮城野陸前も、

吟節攪勝入煙蕪、野草野花路欲無、惆悵當年幽絕處、近來鋤地種蘿蔔、

松井梅屋

曰 人

宮城野に大根植てへらしけり

となり了はんぬ、美や利と未だ相調和せざる、由來同一の感慨、

美、利と未だ調和せず

亞細亞大陸地質の研鑽、日本の地學家に寄語す

(八) 亞細亞大陸地質の研鑽 日本に寄語す

是れ「日本風景論」を帥し了るに當りて言ふべきもの、想ふ日本、東洋の表に立ち、地質固より西大陸と等しからず、故を以て西洋地學家が定用する所の術語は、日本の地質系統を概括するに不明瞭、不便宜なる所多々、是れ日本の先輩地學家が三波川層、御荷鉾層、秩父系、小佛系、三倉層、八谷層、御坂系等の新術語を創作せし所因、蓋し彼土の地學家、所在の岩石に命ずるに、
イレンシヤン系、ヒューロニヤン系、キムブリヤン系、サイルリヤン系、デヴァニヤン系、ジュラシツク系等の名稱を以てするもの、是れ此の如き岩系の亞米利加、英吉利、佛蘭西に多在するを以てのみ、而かも日本や、素と亞細亞大陸より分離せる一大陸島、遠く太古に遡れば、大陸の一部分、故を以て亞細亞大陸の岩系、岩統は日本と等一なるもの多きを知る、ローレンシヤン、ヒューロニヤン、キムブリヤン、サイルリヤン、デヴァニヤン、ジュラシツク等の名稱、業既に

亞細亞大陸地質の研鑽 日本に寄語す

亞細亞大陸の地質系統は須らく日本地學家の使用する新術語を以て概括すべし

亞細亞大陸地質の研鑽 日本地學家に寄語す

二百六

彼土の地質系統を概括し得亞細亞大陸の地質系統豈に日本の三波川層御荷鉾層秩父系小佛系三倉層八谷層御坂系等の名稱を以て概括し得べからずとせんや日本は亞細亞の先輩國たり亞細亞人文の開發は日本人の天職とする所乃ち西洋地學家の未だ亞細亞大陸の地質を甚だ研鑽せざるに當り日本の地學家たる者須らく之れを辛苦經營し三波川御荷鉾秩父小佛三倉八谷御坂等の新術語を以て亞細亞大陸の岩石系統に冠せしめ以て日本理學の命名を千秋に垂れ以て世界の理學に大材料を寄附し以て日本地學家の使用せる新術語を地學世界到る處に使用せしむ是れ日本地學家の爲す有るべき所にあらずして何ぞ幸に日本の地質圖は先輩地學家諸君子の辛苦經營に賴りて略ぼ大成す今後の爲す有るべきは實に亞細亞大陸地質圖の大成に在り想ふて此所に到れば西天を睨睥して長吁するもの幾回誰れか吾妻嶽上澗々所の鮮血を拉して之れを崑崙の山巔に澗々者す

雜感

花鳥、風月、山川、湖海の詞畫に就て日本國を構造せる主要の岩石

(九) 雜感 花鳥、風月、山川、湖海の詞畫に就て

●(第一)日本國を構造せる主要の岩石 を先づ參考の爲め列擧すべきか。

水成岩

無生大統

片麻岩類。雲母片岩。角閃岩。大理石。Ectolite岩。滑雲母片岩。雲母片岩。紅霞片岩。Glaucophanite片岩。斑點石疊片岩。斑點滑雲母片岩。斑點綠泥片岩。綠泥片岩。等

古生大統

秩父系 輝岩。石英岩。石灰岩。Almond板岩。古生紀凝灰岩。砂岩。粘板岩。變岩。角岩。Bathonian板岩。等

中生大統

粘板岩。砂岩。頁岩。變岩。石灰岩。珠羅系 粘板岩。砂岩。頁岩。石灰岩。白堊系 砂岩。變岩。凝灰岩。頁岩。粘板岩。石灰岩。

雜感

二百七

近生大統

一 第三紀 凝灰岩。砂岩。礫岩。角礫岩。凝灰質砂岩。頁岩。泥灰岩。礫土。等
二 第四紀 壤土。砂。粗質礫岩。粘土。等

火成岩

古噴岩 花崗岩類。石英斑岩。閃綠岩。石英閃綠岩。橄欖岩。斑輝岩。蛇紋岩。輝綠岩。閃綠玢岩。輝綠玢岩。等

新噴岩 石英粗面岩。黑曜岩。真珠岩。浮岩。Dacite。粒狀安山岩。輝石安山岩。角閃安山岩。頑火石安山岩。火山燒岩。玄武岩。等

富士山は名山の標準

●(第一)富士山は「名山」の標準

となすは、古往今來皆な然り、

富士の山おなし姿に見ゆるかなあなた面もこなたおもても衛門香附郡
と、圓錐体火山を描きて餘蘊なし、眞個に「名山」の標準なる哉、日本の山嶽、富士を標準とし、富士の名稱を冒かすもの多々、獨り安山岩(火山岩)たる岩木山、開聞嶽の

富士見すはふしどやいはん陸奥の岩木の岳をそれと詠めん定家卿
薩摩かた頼娃郡なるうつね島これや筑紫の富士といふらん松葉集
讀人しらす

と咏まれ安山岩たる岩手山の、南部富士、吾妻山の、吾妻富士、榛名山最高點の、榛名富士、大室山(海拔五七五米突)の、伊豆富士、西山の、八丈富士、飯ノ山の、讀岐富士、興居島南なる一山の、伊豫ノ小富士、由布嶽の、豊後富士と異稱せられ、玄武岩(火山岩)たる可也嶽(海拔三九八米突)の、筑紫富士と喚び倣さるのみならず、花崗岩たる比叡山すら

ふりつもの雪の頃なほさそなども都の富士の嶽のあけほの拾遺集
と咏まれ、古生紀岩中に噴出せし花崗岩たる三上山(海拔四五八米突)は
おもひたつ富士の根とほき面影は近くみかみの山のはの雲 堯孝法師
と咏まれ、班岩たる角山(海拔四六二米突)も亦た

吾妻見ぬ人のためとやうつすらんこゝに有馬の富士の芝山 藤原宗繼
と咏まる要するに、富士山を以て標準となすは皆な然り、

●(第三)詩文、俳諧、繪畫は理學と調和適合せざるべからず

想ふ畫人、俳人、詩人の要は、能く宇宙の幾微を吹鼓し、神韻縹緲、恍乎として自然と同化冥合するに在り、而かも多く之れを悟らず、動もすれば輒ち没

詩文、俳諧、繪畫は理學と調和適合せざるべからず

理學是れ事とす、惜ひべからずとせんや、此間に當りて

竹窓夜靜近三更、猶註孫吳眼益明、山雨欲來龍氣動、一池健鯉躍成聲、

菊池溪琴

住みなれしこの里人のいひけらくあすは雨ふらん嶺の白雲 高橋石足

詩歌共に善く水蒸氣の現象及び結果を描き、能く理學と調和適合す。

驟雨と畫くに

●(第四)驟雨を畫くに

畫家大抵は斜線に描くを常とす、而かも

大陽の光線と畫くに

●(第五)大陽の光線を畫くに

畫家間、旭光と旭光の外とを分

別せず、午前約八時以後の光線と雖も、紅色の彩具を用ふる者あり、午前約八時以後の光線は黄色なり、絶えて紅色にわらず、午後約五時以後、大陽の傍近は淡紫色となり、其上に淡紅色、淡黄色を彩るも、漸く日没に近くや、一轉して大陽傍近は純紅色となり、其上に黄色、淡紫色を彩るを常とす。

畫人青涯

●(第六)畫人青涯

畫人、世情と伏仰し、黄白を愛み、阿堵物に醒礙す、

太俗太俗、曠世の大作、絶代の傑品を新創す能はざる固より然り、畫人青涯の言行末だ以て悉く調となすべからず、而かも意味脱灑、天真爛熳、毫も塵俗の氣なく、飄蹤放跡の間、髣髴として、畫君子の本色を得、況んや其の落筆する所の山水畫間、神に入るものあるをや、感ずる所あり、爲めに傳を立つ、青涯、姓は櫻間、參河岡崎藩士なり、畫を渡邊華山と、同門に學ぶ、華山、常に人に謂て曰く、青涯の山水畫、氣韻高尚、予の遠く及ぶ所にわらずと、青涯、人と爲り、眞率無我、平常錢を得ば、輒ち酒に代へ、放浪飄逸、赤貧洗ふが如く、負債山積、債鬼交門に迫る、乃ち深く門を鎖して、内に沈黙閉居し、時々犬クマッリ戸より竊かに出入して、酒を街上に購ふ、鈴木椿山と友とし、善し、一日椿山、青涯を訪ひ、其戸を敲く、會、戸内に聲あり、曰く、今日不在と、其聲正に青涯なり、椿山之れを怪しみ、潛かに戸内を窺へば、青涯裸體にして、獨坐し、傍に一の衣類あるを見ず、椿山意ふ、此故なりと、戶外を視れば、一單衣洗濯して、竿頭に在り、椿山衣に觸れて、試みるに、既に乾けり、即ち衣を取り、少しく戸を

開き、之れを内に投じて曰く、斯くても猶ほ不在なりやと、青涯乃ち起たんとするに、鬚鼻揮なし、側の扇を取りて、臍下を蔽ひ、進みて衣を取り、之れを着し、大聲呼びて曰く、青涯家に在り、青涯家に在りと、青涯又た書を作るに、一の文房具なし、僅に筆硯あるのみ、服部波山、弱齡の時、其家を訪ふ、會醬油樽を兩側に置き、脚となし、上に雨戸を載せ、之れに甕を敷き、以て書を作す、室中疊席無く、空虚なる米俵を敷き、賓主共に此上に坐して、毫も愧づる色なし、又た一日、四五の友人、青涯と街上に會ふ、青涯曰く、請ふ、明朝朝餐前、予が家に到るべし、聊か蕎麥を供すべしと、諸友意ふ、青涯赤貧洗ふが如し、其の子輩を招く殊に異なり、然れども、蕎麥は固と價の賤廉なるもの、青涯或は供すべしと、明旦、諸友朝餐に就かずして、青涯の家に到る、青涯欣然、之れを迎へ、談笑數時、而して、蕎麥の供なし、衆皆な飢ゆ、而かも強て談笑す、日亭午を過ぐ、未だ供なし、忽ち青涯家を出で、暫くして歸る、衆意ふ、彼れ必らず、蕎麥肆に到りたるものと、果して、蕎麥肆の丁僮、一大盤を運び到る、衆輒ち曰く、予輩約を踏み未だ朝餐に就かずして到る、甚だ飢に堪へず、請ふ

沼豈に美なからんや

速に盤の蓋を開けど、言未だ訖らず、各、手を延べて蓋を開かんとす、青涯蓋を擁して曰く、昨日諸君に約するに、蕎麥の供を以てす、是れ此の壁上に掲ぐる書幅の潤筆料を以て、蕎麥を購はんと期したればなり、是より前、書き畫の依頼者は、僕に期するに、今日早天に來り受領せんことを以てす、是れ朝餐前に當り、諸君に蕎麥を供せんことを約せし所因なり、而かも彼れ依頼者、今猶ほ到らず、僕も飢へたり、諸君の飢へたる想ふべし、僕患へ、街上の蕎麥肆に到り、暫時之れを貸與せんことを求む、肆の主人頑然として、應ぜず、僅に蕎麥の湯を命じ來れりと、乃ち盤の蓋を開けば、沸々たる蕎麥の湯のみ、衆大咲、覺はず、絶倒し、各、湯を呑みて去る、其の眞率なる、大概此類、出で、遊ぶに、晝夜を辨ぜず、酒を呑むに限りなく、時々出仕の定時を違へ、門限の期を過ぐ、然れども、岡崎侯其才を愛して、惡まざりしと云ふ、青涯の畫作は、東京駒込西善寺に藏するもの、絶品なりと。

◎第七 沼豈に美なからんや 天地の間、何物か美ならざらんや、鹵濕沮洳の處、沼澤水淀の處、人多く之れを厭ふ、而かも其間豈に美なし

とせんや、淺波水濁りて雨煙の如く、鳧兒時に拍々し、蘆芽未だ短くして、白鷺全身を露はす、豈に是れのみならんや、鯽魚一寸、萍蓬草黄く、澤瀉白き間に唵囁し、南柴胡紫葩を吐きて、螢光點々其上に亂拂す、其他水草の最大最愛嬌なるもの、大抵は沼澤に亂開す、沼豈に美なからんや。

自然の大妙は變々化々限り無き之間に在り

●(第八)自然の大妙は變々化々限り無き之間に在り

若し夫れ單趣一様始終永劫に遷轉改新の彷彿すべきなけんか、何の處に向ひてか、竟に慰悦興快を求めんとする。赤道線傍近草樹禽獸怪異富饒、而かも自然の妙境は赤道線傍近に纏綿せざるなり、夫の常綠樹、人之れを絶愛す、然れども秋風蟬聲を奪ひ去りて、繁霜滿林を紅化し、草枯れ綠盡き、冬枯れの候あればこそ人に愛づられ、冬枯れの候にして無かりせば、其の愛づらるゝ如何ず此に到らんや、南北二極圏内も亦た然り、混茫一白、何の處にか妙味の尋ねべきぞ、想ふ東風水を解きて、魚其上に出で、土脈潤ひ起りて草木萌動し、霞靄漸く翳きて、雷乃ち聲を發し、蟄蟲戸を啓きて、幾多は蝶と化し去り、梅花先づ郊村に綻びて、桃櫻杏梨、二十四番取次に亂開し、百花

狼藉の間、黄鳥は金衣公子の代身として妙音樂を奏し、燕子到り、鴻雁返へり、虹始めて現はれて霜既に止み、兼葭芽を抽ずる頃、牡丹芍藥宛かも紅欄干外に媚咲す、既にして田田蛙聲急に、蚯蚓出で、蠶桑を食み初め、竹筍土を穿ち來りて、紅藍花火の如く、麥秋の季節、黃梅の時期交るゝ、到りて滿庭の新緑半池の燕子花方に、人に可なり、次で炎風來り、螻蛄漸く長じ、白桐花を結びて、睡蓮曉露に披き、雷雨驟かに下りて、一夜積暑を洗ひ去る、既にして新涼動き、氣味水の如く、燈火讀書兩つながら親ひべく、玉露金風、蟲聲滿地、時に鶉鴉鳴きて、鴻雁來り、燕子返へり、菊花紅葉、白霜黃橙、禾果齊しく實る、既にして虹藏くれ、朔風木葉を拂ひ、熊穴に蟄して、鹿角落ち、天凝り、地閉ち、六花繽紛、其の活力の現存を表示するものは、松柏科、厚皮香料植物(山茶、茶梅、茶茗)と側金盞、款冬、水荊の如き草類のみ、既にして一陽來復、春色復た天地に充つ、要するに自然の大妙は變々化々限り無き之間に在り、偶々徒れ、草を讀み、ゆくりなく左の一節に會ふ、言ふ所壯大跌宕ならずと雖も、自然の變化を寫し出して、優に神品に入る、是れ此所に抄出する所以。

をりふしの移りかはるこそ、物ごとにあはれなれ、物のあはれは秋こそまされど、人毎にいふゆれど、それもさる物にて、今一きは心も浮きたつものは、春のけしきにこそあめれ、鳥の聲なども、この外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草もえ出る頃より、やゝ春深く霞渡りて、花もやう／＼けしきだつほどこそあれ、折しも雨風うちつゞきて、心あわたしく散り過ぎぬ、青葉になりゆくまで、萬にたゞ心をのみぎなやまず、花橘は名にこそあへれ、なほ梅の匂にぞ、古の事も立歸り、こひしう思出でらるゝ山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難き事多し、灌佛の頃祭のころ、若葉の梢すゞしげに、繁りゆくほどこそ、世のあはれも、人のこひしさもまされど、人の仰られしこそ、げにさる物なれ、五月あやめゆく頃、早苗とる頃、くひなたゝくなど、心細からぬかは、みな月の頃、あやしき家に、夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり、六月祓又をかし、七夕まつるこそなまめかしけれ、やう／＼夜さむひになるほど、雁鳴きて來るころ、萩の

下葉色づく程、わさ田かり乾すなど、どりあつめたることは、秋のみぢかはかる、(中略)さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさ／＼とどるまじけれ、汀の草に、紅葉の散とままりて、霜いと白うたけるあした、遣水より烟のたつこそをかしけれ、年のくれはてゝ、人毎に急ぎあへるころぞ、またなくあはれなる、すさまじき物にして、見る人もなき月の寒けくすめる、甘日あまりの空こそ、心細きものなれ。

●第九 筑波山頂の眺望

山は峻秀高聳なるを以て、眺望絶佳壯

宏なりとせず、常陸の筑波山、嚴格なる術語に準據せば、僅に「丘陵」以上のみ、然れども關東平原に巍然と孤尊するを以て、苟くも東京傍近に在りて、眺望の大快を貪取せんと欲せば、此山に登臨するを要す。佐藤一齋翁の文、此際の消息を描寫して妙、乃ち之れを抄出す。

念四、朝雨開霽、自下館至筑波、四里而遠、有間道、由此則可三里、到椎尾、椎尾、阪寄、皆筑波支山、在北麓、山成三層、下爲椎尾、次爲阪寄、上即筑波陽峯、乃從間道登椎尾、有藥師堂、山多翻猴、進登阪寄、皆石、無樹、無水、純鏗峻、絶

不能目導而脚從。登者往々摩突額鼻。或呼曰額摩。渴輒嚼草以取潤耳。頂稍平。可踞息。又進登陽峯。多老樹。可攀援。既極最高頂。雲鳥皆在眼下。累石安男體。權現祠。東下數百步。有坦夷處。寘二小店。鬻餌以待客。稍南有泉竅。潺湲流。注。即美那濃川發源處。清冽可掬飲。又登陰峰。亦累石安女體。權現祠。眺觀益豁。近則尾尾加波。皆可俯撮。其髻遠則高原日光。秩父諸山。聯延綿亘。高低起伏。而不二山。獨巍巍然坐於坤位。大山箱根。如趨聽使令者。當不二之麓。見一泓如盆池。則浦賀內洋也。加納山。鋸山。亦如培塿蟻垤。而外洋一白曳練。摩房總諸山頂。東趨連於注子水戶。其間殘山剩水。重抹輕掃。烟雲縹渺。丹碧點綴。可謂關左八大州一幅活全圖也哉。乃一周下南麓。石間無路。有竇穴。可出入者三處。絕壁峭立。有棧梯。可上下者一處。石滑趾不能駐。有鉄索。下垂下援。以升降者七八處。山腹有古鐘。不知何世鑄造。何人移置。此山雖不比日光之靈淑。奧深而危險。則不啻十倍。至於眺觀。亦關以東無出此右者矣。

●(第十)百鳥譜

許六、百花譜を草し、半掃庵、百鳥譜を草し、也有百蟲

譜を草す。皆な一代の俳人。其の自然の幾微を寫すや。往々神に入る。想ふ自然を寫さんとする。自然を尊崇するの觀念なかるべからず。而かも俳人由來放浪の極。筆端動もすれば。輒ち淫猥に入りて省みず。獨り支考の百鳥譜。此病に罹らず。妙も亦た前數者に譲らず。乃ち左に抄出す。唯だ末節を削るもの。少病あればなり。

鶴は仙家のものなり。是がみさを人は人に近からず。昔し陶淵明に達摩の風骨ありといへるものは。鶴に淵明が風流あることを知らず。されば野草の花のあきらかに開きぬる時。柴門の月のあらたにすめる夜ならむ。此ものひとりは見まく思ふなり。然るを鷺の無能にして。衣裳もかろそかに侍るは。まして風雨にも厭はじとならん。かの莊周が夢に胡蝶とあそべる。是もむつかしとやは思ふ。雉子の啼く聲はいどかし。こきに百矢の數をのがれずや。あらんといはれて。一朝にたまの命を落しぬるは。是も韓信が輩の文武をつくさざるものなるべし。蒼鷹の人を見こなし。て眼の内にあらとかなる才智をそなへたる。いどにくし。されど一藝に名あるものは。世の人それをゆるしもしつべし。

斥鴳 大鷗

鳳凰

稻負鳥 呼子
椋鳥 呼子
椋 呼子

駒鳥

目白 頬白

雲雀

三光 佛法僧

鶯

提壺 布敷

雜 感

かの斥鴳が蓬生の宿は膝をいゝに過ぎねば大鷗の雲の万里を羨
まずさらばこれのれを樂むのみにして必ずうらやむ方にもあらずか
の鳳凰といふ鳥はいかなる鳥にかあらむ。

稻負鳥呼子鳥とかやはく鳥は春に住むなるよしなかに物にや知ら
ず椋と椋との二鳥は其實をばめる時の名なるべし然るを鶴といふ
鳥の花にれきふしたらむいと心得ね木々の花の咲こぼれて明ぼの
の雪にもまがへる時は駒鳥の聲のみひやゝかにしていとよしされ
ば此鳥の名は聲のたぐひをいへるならんおのれがかたちを名にな
せるものは目白頬白のたぐひなるに鶴は殊におかし年々菊をいた
たきける自然の理はあまたねどもことしはめづらしう梅花をもか
させよかし。

雲雀は小春の空をよくかばれて鳥羽の田づらなどにふと啼出たる
にかひつけて啼る鳥もなければあはれさびしき物かなと思ふ時も
ある。

三光は啼く時に日月星といふなるよしむつかしども思はぬや佛法
僧と啼く鳥ありて高野の山にのみ住むなる是をも三寶とこそいは
め然るに鶯の法華經と唱ふるさるは世さらに老めきたるわざなり
提壺の美酒をかひ布敷の袴をぬけよといふは皆おのれがゆゑなら

蜀魂

雁 時鳥

鸚鵡

燕

鷓鴣

ねど世の人の然らしむるものなるか蜀魂の不知蹄と啼くはさはめ
て托物の聲ならんのみ。

秋の雁の江天にかくれ時鳥の曉の雲にさけぶいつれにかさだめ侍
らん雁はあはれにほとどぎすは悲し。

鸚鵡は思をわすれぬよし此國にはまれくなればよ知らずむかし
蔡君が鸚鵡しもは翠琶が身まかりし跡の名を呼傳へしに心をいた
ましむ瘴江のほとりかなむく遊べども同じくかへらずといへる配
所の詩ならばさもあるべし我國の鳥も物は得言はずして萬里の別
を暮ひ行けるとかや扶桑十夷志八有飼鳥渡海幕主君之故事是さへ
思ひかけぬ事なるべし。

燕もゆかりは忘れぬ鳥なり終日にひるがへり終日に啼りて餌には
必ず身をつくさずやいは江湖の僧の一夜二夜にちぎり捨て身を
雲水にまかせたるが年を経て後は見知らぬ人も多かるされば行脚
の身の人にも送られたのれも送りたらんに涙のこぼるゝはいかな
る時にかあらんかの法師の宿かし鳥とよみつゝけぬるより孤村に
出て夕陽を啼盡せば誰が家には今宵もおくらんとおちきな事も
思はるゝなり。

鷓鴣とは名のかしこきものなり青草の暮の雨には遊子の魂を驚か

雜 感

水鷄
千鳥

鳴
馬糞壘

白鷗
諷鼓鳥

鳩

泉

雜 感

二百二十二

し、黃陵の曉の雲には旅人の涙を催す、すべて夜啼くものはかなしき
 に、水鷄は隱逸の風情を得たり。
 星月夜のおぼつかなき比に、磯の千鳥の多くあつまりゐて啼くは、心
 もきゆべくてかなし。たゞ人の別墅なる所に、水の湛もいと淺くて、常
 は來馴れて遊ぶらん、戸などかいやりたる音に驚きて、忽ち二三聲の
 すみ行くは、其あども遙に見送られて、河風寒しと思ひ出たるは、待た
 るゝ人もなくて何にかはせむ。
 鳴はましてたつ時のあはれなるに、馬糞といふ鷹の風にひるがへり
 たる、なまうかひにていどにくし、かの澤の夕暮は江山の風情をそな
 へたれば、もろこしの雲夢ときこゆし、澤は、いかなる澤にかあらむ。
 白鷗は人をさけてかのかれ静なるものなり、然るを諷鼓鳥のかのれ啼
 て人をさびしがらせむとす、なべて卵の花の曇はいとぬふけなるに、
 夕日の影も木の間にちり残りて、山にはおもひかけぬ鳩も啼くなり、
 啼く處のさだかに知れねば、是もいとさびし、此ものは偏に雨の日を
 かなしめるどかや、百花の深き所ならば、終日ぬるども、厭はざらまし。
 泉の晝出て迷ひありきぬるいとれかし、必ず笑はれむとはたらきた
 る顔にもあらず、さるたぐひの老僧にや、むかしも市中に遊びぬける
 なり。

鴉

啄木鳥

鶯

雀
家鷄
鶯

雜 感

二百二十三

深草に住むなる鴉は、其聲すみやかにして世を憚らず、山にも近く水
 にも遠からず、栗の穂の静なる時は、こゝにも出て遊ぶなるべし。
 啄木鳥の飢を忍びかねて、木にそひ梢をたゞきあるきて、終日静なら
 ぬこそ、はかなきわざなれ、限なき生涯のいとなみどならば、誰もく
 あさましき事多かるべし、されば空山の日影に、電たばしりて、楢の柏
 もちりん、吹かれ行く比は、此鳥の聲の更に幽にして、いざや張道
 士が家をとふらふ人にも似たれ。
 木がらしの夜一夜吹あかして、しのゝめには吹かずなりぬるを、さし
 出る朝日の、殊に珍らしうさし籠めたる障子のかざりは、もゆるばか
 り長閑なるに、物の影のさど過ぎてまたゞきもあへぬは、いかなる鳥
 にか侍らんと、いつも、思はるゝなり、蓋し鶯などのゆるやかに舞
 ありくも、隙を過ぐるほどなれば、あはたかしきか。
 軒の雀の晴をよるこびて、何やら殊の外に啼る、是は市人にもたどへ
 侍らん、鶯は、基僧の風情にして、人の隙を窺ひありくものなり、家鷄も
 同じ家において、おのれが身を惜しども、思はずや、たゞに淤泥のけが
 れをも厭はすして、是を世の外に出て物にもかゞはらぬと思ふは、さ
 ばかり悟りたがへたる事は、世の上にもあるかし、そなへかきた
 る翅も、いつかは青雲の心ざしにあへらむ、誠にあはれむべし。

雜感

世に人を葬る者ありて、常は顔など見合すべきにもあらねど、なすべ
 きわざあれば、呼で酒のませ價をもやりつ、然るに鵜といふものは詮
 むき鳥なるべし、早川に魚などかづきあげたる、此のれならずとも網
 しても得つべし、さるものならば辨へぬこともあるべきに、人の手に
 かはれて、追はみたる魚をも白地に吐かせて、それをめでたしとさ
 めかし、笹の葉打させて贈りもかくられもする人は、鳥よりは一しは
 も劣り侍らんか、鷹は羽の下に鳥を組敷きて、譽を人にも見られむと
 思ふは、せめて名の爲にもなさばなりぬべし、さらば此ふたつのもの
 を我友となさば、打かさたる心のいとまもなからん。
 鷓はたちむにつれなくて、へつらはぬものなり、子など持たらばいか
 にかあらん。
 鷓の風情はいとなまめかし、何がしの中將がわづかに人を思ひそめ
 て雨にもそぼち露にもしほたれて、常の心もさだかならねど、色には
 出でじくどこそ忍ぶなりけり、されど田面にうかれ出て田螺ふみ
 まよふ比は、まさしくさる物のたどへども覺えずなり。
 楚臺の夢は一夜の枕に驚き、驪山の契は萬里の雲を隔つ、朝の嵐に錦
 帳を動かせば、李夫人が影もふたゞびは盡ることなし、然らば翡翠と
 いふ鳥は、いかなる美人の魂にかあらむ、杜子美が衣桁に啼くといへ

雜感

●第十一 發句、俳諧 是れ一般平民の間に清高幽雅の觀念を啓發
 せしむるもの、絶愛するに堪へたり、十七字の句。

るも、此鳥ならで外はあらじ、名にめでと、是を我友となさば、はしなき
 人にやあやしまれむ、名を聞くより其姿の思はるゝ、鷓鴣の中は更な
 り、珊瑚といふ名は世の人のきくをもかざれるかな。
 鷓の聲は滑にして、殊に住所もいやしからねば、是も美少年のたぐひ
 にはあらめど、風情やゝおだやかならず、まして夜ならぬはいぎたな
 しどもいへりけり。
 鷓鴣の世をさみたる中にも、鳥ばかり、鷓のいやしきものはあらじ、夕
 べには寝まどひ朝にははやく起きて、前栽の木の実などにつきては、
 ねおもひ捨てずや、いかなる時にか息などもつまるやうに啼て、いと
 どにくさげには侍るなり、それをも神のつかひのみならば、かゝる事
 いひもせまじ。

およそ、鳥の嘴のたいらぎたるものは、死水のあかを嚙り、どがりて長
 きものは魚を探り侍る、五穀をはめる鳥のまどかにして細やかなら
 ぬは、誠に備はりたることなるべし、嘴のさきのかいまがりたるは、
 のれが友をやぶるべきたくみにや、いとこそろし。

自然と寫す跌宕の語

●第十二 自然を寫す跌宕の語

は世間未だ

あら海や佐渡に横たふ天の川

の如く太簡にして而かも太跌宕なるものを看ず、一語大海の胸を盪かし、歌々たる銀河の金峯山上佐渡を帶する處、歴々眼前に映じ來る。

名取川の秋

●第十三 名取川の秋

大槻磐溪名取川陸前の秋を咏ず、錦に似

秋老源頭霜氣清、墜紅泛泛逐流輕、夜來急漲漁梁落、幾隊香魚破錦行。

河内の景象

●第十四 河内の景象

篠崎訥堂句あり、景象を寫して畫の様

路入河州吾未會、孖山稍近露雙稜、蟲聲滿地午猶咽、野草秋風何帝陵。

紀伊の景象と仁科白谷

●第十五 紀伊の景象と仁科白谷

日本國中、磊砢の形姿を具

へて、萬象の蘊奥を含み、造物の鍾ひる處となるも、僻隅に在るを以て多く人の品題賞鑒に遇はず、幽遠の間に埋没するを紀伊の内部、南部となす。豈に無情の山海のみならんや、有情の人も亦た然り、山林之儒、自稱仁科白谷の如き是れ、白谷身軀魁偉、腕力人に過ぎ、劍客游俠の徒に交はるの間、海内の名山に登り、巨川を窮め、或は長林に浩歌し、或は絶島に孤嘯し、氣力邁往

一韵到底の長古一篇五百五十句を賦するに到る、而して世其名を知らず、坎柯落拓客死して止む、痛むべき哉、其の遊南紀歌及び紀州雜詩に曰ふ、

嘗遊芙蓉峰、下視萬國山、手掬星漢水、逍遙帝坐間、沆瀣滴我衣、嵐氣撲我顏、超然遺身軀、吸風立空寰、今我投紀南、洗眼碧玉海、金峯當水起、雲物渾五彩、瓊殿參差竦、中有真人在、翩翩駕雲車、怡悅如我待、廻眸指點洞開處、爲說神界勝、幽崖之下、澗紺寒、石髓皓皓凝、蒼藤鬱陰黑、翠館東泉、松脂滴古香、瓊芝雋鮮、浸淫玉液、泄錯落琥珀爛、可以漱兮、可以餐兮、聽之直揖去、高吟朗嘯、極盤礴、神風冷生我屐、吹破紫雲幕、千奇萬怪、忽有無、無端瀑布懸寥廓、初驚天駟爭下重九、中訝崑岡頽碎玉灼、終疑帝使風伯吹散雪、山雪化作萬鶴舞、之九霄碧落、對之清視聽、踞石嚼寒葩、神氣益澄凝、冷冽徹仙牙、凌空更窮瀑之源、俯聆廣樂心更快、因訝再遊芙蓉峰上、手掬漢水立天界。

南州靈異地、風物一乾坤、山藏秦民骨、谷抱平氏孫、惡寺應浮海、避亂此逃源、遼矣煙波外、逸書今尙存。

雜 感

海師方外傑、頗讀我儒書、卜地開名嶽、營堂倚太虛、山雲潤柱礎、空翠濕巖居、詩卷有靈集、讀來或起予。

光浦何明媚、無山不翠微、香刹抱松洞、漁家傍柳磯、魚在鏡中靜、人行畫裏稀、夕陽望更好、遊子澹忘歸。

神女琛宮麗、管公古廟空、桐絲傳夜響、梅蕊弄寒紅、月冷垂林露、香清渡浦風、嘎然孤鶴唳、應向紫霄冲。

大海浮天深、巒村處處孤、長鯨噴浪去、遠帆入雲無、水底窺蛟窟、沙邊拾蚌珠、遙遙霞正合、何路到方壺。

界破翠崖來、飛流千尺白、訝將萬斛珠、自碧雲間擲、倒走吼銀龍、高懸明素霓、祗疑衣袂濕、無處不濛濛。

此人南紀の鍾靈を讚美して餘蘊なし、人を得たるを嘆ぜざらんや、白谷備前邑久郡蟲明村の人、弘化二年五月、播州加古郡今市正覺寺に窮死する者

日本人は自然の美を愛す

●(第十六)日本人は自然の美を愛す 基督教長老エス、エーバーネット、貧民問題に關する一篇の論文を、二週日評論に寄せて曰く、

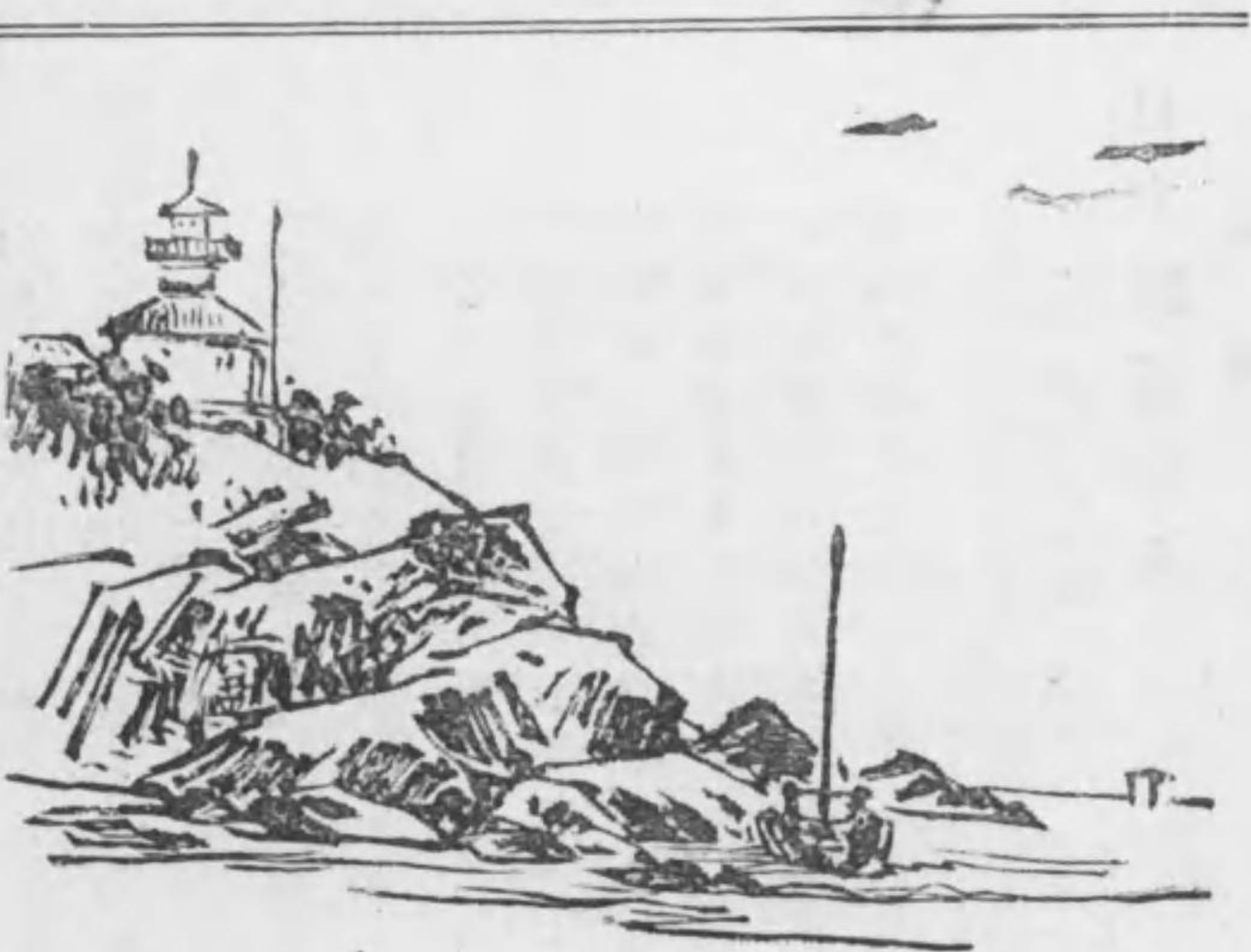
印度にて貧民を救濟せんとするは絶望と云ふべく、支那の貧民は業既に猥穢に陥り、米國にては幾回か之れが救濟を試みたるも、其効なきのみならず、却て救濟實行中に米國政府の官吏を腐敗せしめ、貧民より怨望惡感情を招くに到れり、獨り日本のみは、貧民個々希望を懷抱し、社會的生活の眞味を領するものは、抑何の理ぞ、一は土地分配法の適宜にして、個々若干の土地を所有し、各力作して以て自己の衣食を供給する事是れにして、一は國民を擧げて山野の美を絶愛する事是れなり、即ち相同伴を作して花を賞し、單に自然の美を探らんとて巡禮行脚するの盛んあるは世界中復た日本人の如き國民あるを看ず、既に國民自然の美を絶愛す故に、居常熙々快暢復た都門に入りて煽惑挑撥を求むるなく、渾然融化して、自から貧を忘るゝに到る云々。

風塵草頁舊題詩。又感興亡欲策時。一角春山煙吟骨。燕泥雨汚驚人髀。知川生題

日本風景論終

雜感





南、北、二、極、園、裡、白
 皚、皚、此、の、變、化、改
 新、な、ま、き、處、赤、道、線
 畔、鬱、葱、葱、舉、り、道、線
 均、齊、單、趣、な、る、邊
 如、何、を、造、化、の、太
 之、れ、を、悟、り、得、ん、や、
 は、唯、た、曰、本、に、在、る、哉。
 り、曰、本、に、在、る、哉。



筑波山府、一般の
 雨後、春は運し東
 西南北の村、紅霞
 二十里、元荒川の
 一水西北より來
 り、神機平原の間
 と曲折し、水波は
 經の波は流れ、沙
 塵其の最も暖き處
 に細流し、漁人艇
 と蘆芽三寸の邊に
 停めて四ツ手綱と
 曳く、獲る所に何
 ぞ、鰻、魚、鰻、魚
 リ、マロコ、ハ、
 北、兩岸の楊柳、淡く
 して煙の如く、桃
 花、其間より映發
 凡、真箇に一橋の
 六、錦橋、橋、圖。
 里、花外の茅屋數棟、
 踏きて、参観、箭、康
 と、茶、さ、し、む、し、
 一、箱、の、遠、茶、を、吸、る
 も、亦、在、住。
 嗚呼、何に、故、予、名
 奔利走の間に、周旋
 する、警、々、役、々、
 以て人生と、了、らん
 さ、する、か、此、の、天
 地の大觀、玉、環、を、如
 何せんとする。
 不折盡

越ヶ谷附近の春色

忠言苦言の批評少々、而して他は皆な
敢て當らざる所のもの、日本風景論は
何にを以てか一世の知遇に酬ひんと
するか、唯だ今より愈舊材料を訂正し、
益、新材料を補加し、拮据經營、聊か以て
酬ふ所あらんのみ。 著者 謹謝



●學生諸氏に告ぐ
休暇の日あらんや、須らく往復六七里の遊行を勤む、春は黄葉青夢
の間、夏は綠蔭白水の邊、秋は翠山紅葉の處、冬は茶褐色淡紫的な
る萬象の裡、眞個に詩に責し、文に責し、學に責し、頭腦の一新に
責し、身軀の健康に責するもの多々なるを知る、乃ち各自の家若く
は寄宿所より握り飯六七頓或は喰麵包半斤を腰に着け、青銅二三錢
(渡船、橋買等の用に)を懐中せば、盡日自然と樂むに足らん。將た
又た植物採集罐の内に鉛筆二枝、手冊一部、小刀一張、シャッター一枚
を納め、罐の表部を毛布にて纏ひ、斯くして腰を肩に懸け、都
市の中にて平常費す所の一個月間の學費を懐中せば、優に夏期休暇
の全期を最と樂しく遊行するに足る、如何ぞ發居すべけんや、試み
ざるべからず。

●一家族に告ぐ
想ふ西洋の人、日曜日禮拜を畢るの後、家族相伴ひて三々五々、夫
は數物を籠に挟み、妻は喰麵包、サン／＼ビヤ／＼を入れたる小籠を
提げ、曠は同く小籠を提げて内にラムネ、コロンビーフの罐詰を
入れ、兎は小籠に蒸籠、林檎(一人に付凡三頓宛)を入れ、翁はギョ
ケットの内に砂糖、乾酪と新聞紙の反古に裹みて入れ、且つ各自ナ
イフ、肉叉を携へ、或は樹の蔭に敷き、或は海の涯に團坐して優
遊し、以て一週の勞に酬ふるを例とす。我邦の上流社會、休暇日
し謂へば、家族中の一部分が酒を酌みつゝ、茶、將茶、カルタ等頭腦
を費す靜坐的遊戯を事とするが如き、最も取らざる所、須らく家族
相率ひて行厨を提げ、平和健康にして且つ最も經濟なる野遊を試み
んことを勤む。

明治廿七年十月廿四日初版印刷
明治廿七年十二月廿七日増訂再版
明治廿七年十二月廿三日増訂再版
明治廿八年二月廿五日増訂三版印刷
明治廿八年三月三日三版發行

(定價金五拾錢)



著者兼發行者 志賀重昂
東京市赤坂區靈南坂町三十四番地
印刷者 熊田宜遜
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所 熊田活版所
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
發行所 敬業社
東京市神田區裏神保町一番地
同 東京市神田區表神保町六番地
同 東京市京橋區尾張町三丁目廿六番地
同 東京市京橋區左衛門町八番地

志賀重昂述

第六版 地理學講義

全壹册 定價金三拾五錢 郵費四錢

新聞雜誌批評

第一版批評

地理學雜誌

國語學者... 地理學雜誌... 批評...

今批評者の... 地理學雑誌... 批評...

第五版批評

山陽新報

本誌に於て... 地理學雑誌... 批評...

中國

地理學雑誌... 批評...

ジャヤパン、マイ

地理學雑誌... 批評...

第六版批評

新聞雑誌批評

brotherhood a fifth edition of the "Chūkyōshi Kyō"... 地理學雑誌... 批評...

を見るに、此書の價値を知るに足るべし

●東京日々新聞

志賀重昂氏の著にして、乾癸無味なる地理を、其の詩學的の思想を以て、叙述したるもの行文學に過ぎず。單に其の地理學に對して、其の學問の、其の教科書として、最も適宜なるを譽れ、其第六版を重ねるに至るに、其の其の價値の多くを知るべし。

●新報新聞

期川瀧長の地理學講義は、其五版まで、其の價値を高く、其第六版を發行せり。瀧長の地理學に於ける、其の價値を高く、其第六版を重ねるもの、其の價値を知るべし。

●國民新聞

志賀重昂氏の地理學に於ける、其の最も得意とする所、此人を以て、此書を讀むべし。其の價値を知るべし。

●毎日新聞

此の書の價値は、其第六版發行に依りて、其の價値を知るべし。其の價値を知るべし。

●國會

地理は無意味なり。故に、其の價値を知るべし。其の價値を知るべし。

●福島新聞

著者は志賀重昂氏にして、其の價値を知るべし。其の價値を知るべし。

初版批評

日本風景論

菊版本全一册
貳百貳拾一頁
定價金五拾錢
郵稅金八錢

新聞雜誌批評

明治二十七年

日本風景論を讀む。其の價値を知るべし。其の價値を知るべし。

志賀重昂氏の地理學に於ける、其の價値を知るべし。其の價値を知るべし。

●教育時論

版を重ねる六、中等教育書として、到る處に探照せらるるもの、改め、之を批評するに、對するなり。

●日本

志賀氏の地理學に於ける、其の價値を知るべし。其の價値を知るべし。

●讀賣新聞

志賀重昂氏の地理學に於ける、其の價値を知るべし。其の價値を知るべし。

●國民之友

志賀氏の地理學に於ける、其の價値を知るべし。其の價値を知るべし。

發行所

- 東京市神田區錦町三丁目一番地 發行所
- 東京市神田區長崎町大番地 總發行所
- 東京市京橋區長崎町二丁目廿六番地 東京
- 東京市京橋區長崎町八番地 東京

欠

(三) 雲霧の間に、花の影に入り去る。 (四) 夕陽の影、公孫樹の葉を染める。 (五) 小川の流、石の隙を穿つ。 (六) 雨後の空、雲を染める。 (七) 月夜の静けさ、水鏡に映る。 (八) 秋風の涼、木葉を揺らす。 (九) 霜の降り、大地を白く染める。

北國新聞

(十一月十日 社説)

北國新聞の社説は、日本の現状と将来の展望について論じている。文中には、日本の文化と精神の重要性が強調されており、国家の発展と国民の幸福を追求するべきであると述べられている。また、国際情勢の動向についても言及されており、平和と協力の道を歩むべきであると主張している。

山嶺の峻険、川流の湍急、草木の蒼翠、鳥獣の咆哮、自然の雄偉な姿を前にて、人はしばしば自らの渺小を感じ、自然の偉大さを感服する。この自然の偉大さは、人類の歴史を通じて常に存在し、人類の心を打ち動かし、創造の力を生み出してきた。我々は自然の恵みに感謝し、自然の法則を学び、自然と調和して生きていくべきである。

二見新聞

(十一月十日)

二見新聞の社説は、日本の文化と精神の重要性について論じている。文中には、日本の文化と精神が、国家の発展と国民の幸福の基盤となっており、これを大切に守らなければならないと述べられている。また、国際情勢の動向についても言及されており、平和と協力の道を歩むべきであると主張している。

秋田新聞

(十一月十日)

秋田新聞の社説は、日本の文化と精神の重要性について論じている。文中には、日本の文化と精神が、国家の発展と国民の幸福の基盤となっており、これを大切に守らなければならないと述べられている。また、国際情勢の動向についても言及されており、平和と協力の道を歩むべきであると主張している。

山形日報

(十一月十日)

山形日報の社説は、日本の文化と精神の重要性について論じている。文中には、日本の文化と精神が、国家の発展と国民の幸福の基盤となっており、これを大切に守らなければならないと述べられている。また、国際情勢の動向についても言及されており、平和と協力の道を歩むべきであると主張している。

欠

此の山は、古くは「欠山」として知られ、その名の由来は、山頂が欠けたように見えるからである。山頂には、昔の城跡があり、その遺跡から、古くは「欠城」として知られていた。山頂には、昔の城跡があり、その遺跡から、古くは「欠城」として知られていた。山頂には、昔の城跡があり、その遺跡から、古くは「欠城」として知られていた。

十一月十七日

この山は、古くは「欠山」として知られ、その名の由来は、山頂が欠けたように見えるからである。山頂には、昔の城跡があり、その遺跡から、古くは「欠城」として知られていた。山頂には、昔の城跡があり、その遺跡から、古くは「欠城」として知られていた。

少年園
此の山は、古くは「欠山」として知られ、その名の由来は、山頂が欠けたように見えるからである。山頂には、昔の城跡があり、その遺跡から、古くは「欠城」として知られていた。山頂には、昔の城跡があり、その遺跡から、古くは「欠城」として知られていた。

十一月十八日

日本の火山。一名山一の標識。
春日滝庵(京師の儒士)「志賀重昂氏著「日本風土記」(一)日本近代に於ける歴史の巻(下)巻一山

人蓋神門て自らに能依自七日... 蓋神門て自らに能依自七日... 蓋神門て自らに能依自七日...

わす何五方... 蓋神門て自らに能依自七日... 蓋神門て自らに能依自七日...

蓋神門て自らに能依自七日... 蓋神門て自らに能依自七日... 蓋神門て自らに能依自七日...

蓋神門て自らに能依自七日... 蓋神門て自らに能依自七日... 蓋神門て自らに能依自七日...

蓋神門て自らに能依自七日... 蓋神門て自らに能依自七日... 蓋神門て自らに能依自七日...

蓋神門て自らに能依自七日... 蓋神門て自らに能依自七日... 蓋神門て自らに能依自七日...

地學雜誌 批評 (東京地學協會發行 第六集第七十一卷)

晴南生は定めて巨智部忠承君、地學專攻の理學博士、專攻の學問を以て農商務省地質調査所に長たり、山上萬次郎君亦た地學專攻の理學士、特に地文に精通するの聞ある人、其の批評たる鄙著の足らざる所を補ひ多としするものあり、取りて以て再版の序に代ふ。著者識

志賀重昂先生の日本風景論を讀む

晴南生 謹評

余久しく羈旅に在り、近日家に歸り、朔川志賀先生の寄せらるる近著日本風景論を讀み、先生の地理學に籍りて、浩大無邊、天然力の大勢、即ち天候地貌の景趣、宏壯秀美の觀念を、文藻工藝の上に注入し、以て人文の開發を圖らんとするの捷徑を執らんことに熱心なる偉大の抱負を、歎賞せずんば、あらず、且其所見の浩濔にして、編中述るところ、胸宇に儲藏する萬象を羅列し、其鹽梅の巧妙、讀んで倦むことを知らざらしむるに至りては、詞壇雄將の令名、虚しからずと信ず。世、地理地文の著書に、匪しからざるも、その體や、普通教科書、中、小學の課程に用ゆるに過ぎず、而も概ね無味淡冷、中、小學の幼年子弟なればこそ、其應修課目の一にあるを以て、勉強して、之を講習せしめ得べしと雖も、地文の一般、果して其記憶に留め得るや否や、想ふ著者の寓意は、寧ろ壯年有爲の人に在るべし、則ち教科書流、動もすれば、讀で倦厭の嫌なき能はざる書は、是に到て、充棟、更に其効渺なかるべし、是れ蓋し先生此書ある所以の本意ならん歟、故に、本書は地文學ならず、固より庠學の教科書として用ゆべからず、斯の如く一種特獨の旨意を含蓄するに依り、之を繕くもの、其意の存する所を、味ふを要す、凡そ本邦の如き長足の進歩を爲すに當てや、這般の著書の觀察力を養成する、一興奮劑として、世道に益すること、極めて大なるものあり、何んぞなれば、善く一能事あるものも、周圍の進捗に、後れざらんことを欲するか、故に、一路直行、左右上下を顧みるに、遑あらず、自己も亦得意、先進是れ力め、却て其路上、遺料の猶招ふべきもの、掬ひべきもの、有るも、之を資らず、

晴南生は定めて巨智部忠承君、地學專攻の理學博士、專攻の學問を以て農商務省地質調査所に長たり、山上萬次郎君亦た地學專攻の理學士、特に地文に精通するの聞ある人、其の批評たる鄙著の足らざる所を補ひ多としするものあり、取りて以て再版の序に代ふ。著者識

志賀重昂先生の日本風景論を讀む
晴南生 謹評
余久しく羈旅に在り、近日家に歸り、朔川志賀先生の寄せらるる近著日本風景論を讀み、先生の地理學に籍りて、浩大無邊、天然力の大勢、即ち天候地貌の景趣、宏壯秀美の觀念を、文藻工藝の上に注入し、以て人文の開發を圖らんとするの捷徑を執らんことに熱心なる偉大の抱負を、歎賞せずんば、あらず、且其所見の浩濔にして、編中述るところ、胸宇に儲藏する萬象を羅列し、其鹽梅の巧妙、讀んで倦むことを知らざらしむるに至りては、詞壇雄將の令名、虚しからずと信ず。世、地理地文の著書に、匪しからざるも、その體や、普通教科書、中、小學の課程に用ゆるに過ぎず、而も概ね無味淡冷、中、小學の幼年子弟なればこそ、其應修課目の一にあるを以て、勉強して、之を講習せしめ得べしと雖も、地文の一般、果して其記憶に留め得るや否や、想ふ著者の寓意は、寧ろ壯年有爲の人に在るべし、則ち教科書流、動もすれば、讀で倦厭の嫌なき能はざる書は、是に到て、充棟、更に其効渺なかるべし、是れ蓋し先生此書ある所以の本意ならん歟、故に、本書は地文學ならず、固より庠學の教科書として用ゆべからず、斯の如く一種特獨の旨意を含蓄するに依り、之を繕くもの、其意の存する所を、味ふを要す、凡そ本邦の如き長足の進歩を爲すに當てや、這般の著書の觀察力を養成する、一興奮劑として、世道に益すること、極めて大なるものあり、何んぞなれば、善く一能事あるものも、周圍の進捗に、後れざらんことを欲するか、故に、一路直行、左右上下を顧みるに、遑あらず、自己も亦得意、先進是れ力め、却て其路上、遺料の猶招ふべきもの、掬ひべきもの、有るも、之を資らず、

爲めに、終、完璧を得ざるの誹を免かれざる如き憾なき能はず、余性、山水を好み、地を東西に踏む
茲に年あり、本年、北陸、東山の間に在ること、無慮三閱月、本書載るところの江山、千萬地文の象、猶眼
底を去らざるに、歸來、忽ち日本風景論を讀むことを得て、層一層の感懐を増長し、頗ぶる先生の高
見に敬服し、又その適意を懼べり

先生は參の人なり、所謂、白砂青松の母たる花崗岩地に生し、建築石材は平生其腦裡に印根して忘
れ能はざる所、本篇百四十五頁に説くところのものは、眞乎たる應用地質學者の口吻なり

本書は地質學書ならず、故に、地質學的條目に虧くところあるは言を俟たざれども、左の目は、之を
本著の目の中に加へたらんには、大に地文講究者を裨益する所あらん歟

一、裾野、本邦風景の秀美を占むる、火山の絶麗なるは、大に其裾野の形状如何に由らずんばあら
ず、富士、鳥海若くは海門、裾野の佳景なくんば、又只通常火山と云ふに過ぎざらん、且裾野は土肥て

多く、良種の牧艸を産す、故に、古來牧場の設あり、又名馬の産地たり

一、深谿、北米西部の Cañon は、無比の奇觀なり、本邦亦之に類するものなきにあらず、深谿 Gorge 是
なり、深谿は平坦地層中を流決する、水力の結果にして、軟和の地層中之にを看る、我九州には、豊後、

薩摩、肥後、信濃に、佐久郡、陸中に、鹿角郡は、凝灰砂岩中に在り、或は曰く、豊後由來、韵士を出すは、多く

洵美の風景に富むか、故なり、而も深谿其多きに居ると

一流岩、火山活動の際、噴出流奔して、數里に亘り、或は所謂流岩河 Java Stream、或は流岩牀 Lava She-
et 等を成すもの、又奇觀たり、彼有名なる、甲斐猿橋の絶景、日光の華嚴、但馬の拾戸の飛瀑の如き、又讚
の、屏島、長の六連島、旁近、因の圓通寺、山千石岩の如き、山頂平夷にして、山容卓子形なる、豈偉觀なら
ずとせんや

一、地層の断面、天然の露表に係はる、河海の斷崖、人爲に由る、鐵道々路の側崖を問はず、成層岩層
位の断面に露はるゝもの、或は急斜し、或は緩斜し、或は平坦、或は直立、或は折れ、或は歪み、或は屈曲
錯亂、切差幾千條、隨て地盤の隆起、陷没を示すが如き、奇趣は、蓋し圖畫の遠く及ばざるところ、而も
此眞景、從來工技書畫の題に上るもの、少なし、日本風景論百六面末の松山の圖は、天然露頭第三紀
層を示すもの、一あるのみ

今や本邦特異の地文は、先生千軍を掃ふの筆に依て、世に紹介せられたり、他日、一新改觀、大作傑品
の創成を喚興する、豈管に文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士、地學者に止まらん乎哉

是は日本風景論初版の批評、故に百四十五頁は再版の百五十三頁、三版の百五十六頁、百六面は再版の百五十五頁、三版の百二十一頁

● 矧川志賀君の日本風景論を讀む

日本帝國の風景、由來海内無雙と稱す、而して矧川志賀君の才筆、固より是れ天下稀れに有る所、此
稀有の才筆を以て、彼無雙の風景を叙す、宜なり、開卷一番、吾人をして、奇絶快絶を連叫せしむるや

然れども、是豈日本風景論の抱負する所ならんや

夫れ我邦古より、風流文雅の士亦固より多し、山水の秀靈、風土の清淑、之を詩歌に詠し、之を文章に
讀したるもの、管に、汗牛充棟のみならず、然れども、要するに、皆是れ一篇日本風景の記たるに過ぎ

ず、彼の名所圖繪と何ぞ擇ばん

試に思へ、山の峙つもの、巍然たる何を以て、能く斯の如きか、水の流るゝもの、淵然たる何を以て、能
く斯の如きか、雲行き雨施し、花開き葉落る何を以て、能く然るや、這般疑問の解釋は、之を彼の風土

記名所圖繪に求むるも、遂に得べからず、則ち其文美なりと雖ども、世教に益ある、鮮し之を、近世地
文學書の行文、無味記事、粗野我國風景を叙する、殊に冷淡なるに比するに、未だ遠に、優劣を判し、難

きものあり、一は即ち華ありて、實なく、一は則ち實ありて、華なし、其華實兼有、文質彬彬、明治文學上
別に一機軸を出せるもの、吾人初めて之を矧川君の日本風景論に見る、然れども、日本風景論の抱

負する所、豈管是のみならんや

蓋し日本風景論の特色は、我國風光の美を擧げて、詳に其然る所以を論じ、其我に固有にして、特殊

三

なるを明かにするにあり是故に壯士之を讀めば學識を高深にし志士之を讀めば氣宇を潤大に
す況んや學者をや又況んや風流文雅の士をや是れ豈彼名所圖繪と地文學書とに望み得べきも

四

のならんや
日本人は日本風景の至大至奇至美なる所以を知らざる可らず之を知らんと欲せば須らく日本
風景論を讀むべし抑無極の精二五の粹妙合して斯風景を凝成す日本風景は造化理氣精粹の有
形的代表者にして而して日本風景論は日本風景の一大射影なり

人或は言ふ山水の秀美之を學術的に論究するは太だ妙ならずと是れ言ふものゝ妙ならざるの
み夫れ我れ之を論じ之を究め之を解剖し之を分析す而かも風景の美依然として一毫を損せず
況んや其變遷を尋ね其成因を諍にするに當りては意義更に明かに興味新に加はるをや生嘗て
云へるあり畫家にして地學的眼孔を以て風景を觀ば山の高き水の深き皆一種特別の光を放て
其前に顯はれ詩人的美術的の想像を其心に與ふる更に大なるものあるべしと蓋し其美なる所
以を知りて而して後其美を云ふものは是れ眞に其美を知るものなり余本書に於ても亦云

附言風景論を讀んで寄語我地學家章に至り感慨最も深し火山篇に至り忽ち舊遊を想ふ身は
直に羽化飛揚して山陰三瓶の原上にあり原上の景色舊に依て壯大宏潤恍然として佇立
之を久ふす人あり後より吾を呼ぶ願れば牧童牛に乗るもの一揖して曰く子豈此原の景
を解するや我國の原は皆是絶景火山地方の特微而かも富士の裾野を除くの外人の之を
云ふものなし聞く矧川君頃日書を著し日本の風景を叙す殊に詳なりと然るに澤我輩に
及ばざる何ぞや君請ふ之を先生に告げよ余曰く諾敢て子の郷貫氏名を問ふ童子笑て三
瓶原頭草深き處を示し了て輕烟微霞の中に向て去る余之を呼ぶ再三に及んで始めて身
は今東都紅塵萬丈の中に在るを知る時方に晩秋三更天靜に氣清く西風颯々冷氣人を襲
ふ而して窓外蟲聲唧々亦訴ふる所あるものゝ如し

帝國文學 批評 (帝國文學會發兌)

既に地學專攻家の批評を取りて再版の序に代ふ而かも鄙著の微旨單に地學上のみに存す
るものにあらず會再版發兌の後文學專攻家の批評を得是れ純粹に文章として批評せしもの
の乃ち前の地學專攻家の批評に相對し取りて以て第三版の序に代ふ 著者 識

我日本國人は決して没風流の民族に非ざるなり生計に餘裕なる上流社會は言ふを待たず寒村
僻地の貧農等に至るまで絶好なる風光に接すれば覺えず足を停めて絶美と大呼するに非ずや
盛夏の候に至れば彼等は數十群をなし白衣大笠一席一杖各地に巡歴するを常となす然り我國
人か好風景を愛賞するは寧ろ其天性と稱して不可なきものにして之を夫の貪濫にして飽くを
知らず日夜兀々銖鏞之れ争ひ終に身を以て利に殉する外邦人民に比すれば懸隔管に霄壤のみ
に非ざるなり我國人の天地の好景を愛するの深き已に此の如し隨て之を畫き之を記し之を諷
詠贊稱するもの亦少なしとせず號して名所圖會若くは某小誌等と名つくるもの内務省地理局の
地誌目錄に由れば實に二千四百の多きに達せり之に加ふるに幾多の遊記詩歌俳句の類を以て
せば豈に夫れ盛ならずとせんや是等は固より時には誇張に失し時には偏狹に陥ると雖も其多
數は瀟洒たる圖畫を添へ詩歌俳句を摺集序列し大に遊客の資に供するに足る予輩常に此等の
書によりて我國小なりと雖も絶佳なる風景に富み殊に奇石怪巖に夥たしさを知り心常に此邊
に向て馳せり

志賀重昂君は農學士なり地理學者なり或る意味に於て詩人なり而して一方に於ては國粹保存
主義の創唱者なり對外硬派の中堅たり君今や日本風景論を上梓して江湖に問ふ但し其幾分は
已に亞細亞に出てしものと同しきか如し著者の論鋒の雄健なるは日本人以來已に其幾多の政
治的論文に因て知られぬ今之を此書に徴するに序次整齊秩然として亂れず先づ我國には氣候

一

海流の多變多様なる事を論じて我國生物の種類に富める所以を證し、次には水蒸氣の多量なる所以と其現象を逐敘し、又火山岩の我國に夥多なるを述べては名山とは火山の異名なりとの警語を下し、終に流水浸蝕の激烈なるよりして奇石怪巖若くは青松白沙の絶景を生ずと論斷せり、蓋し我風景の美は已に前人の言ひ盡し盡き盡し歌ひ盡せしに近きも、此書は之と異なり徒に叙述諷詠するのみならず我國の風景に豊富なる所以、其風景の絶奇なる所以を詳論するに於て尤も其力を盡せり、是豈に前人より一頭地を挺てしものにあらずや、余輩固より地文の學を究めず、此書に對して敢て學說の異議を唱ふるの權利あるものに非ず、只此の愉快なる一冊子を把て一美文となし、少しく僭越の筆を弄せんのみ、思ふに、晩近泰西の理學家は、頗る文藻に富み、著はす所の論文舊時の如く乾燥無味ならざるを見る、是れ頗る喜ぶべきの現象にして、文學と理學との隔離は之か爲に漸く近づき來らんとす、然れども此兩學を調和して工なる事、此日本風景論の如きは頗る其欲に乏しきを知る予輩試に一讀して卷を釋く能はず、再讀三讀益す趣味の加はるを覺ゆ、嘗て英の文傑ラスキンの書を讀む、其の天然の諸力を寫すや、其立證を理學に求め、敘事精細微に入り奥を極めながら、而も語句麗琢して美玉の如く、章法秩然一句を損する能はざるを見て、其散文の規範となして彼地に行はるゝも亦宜なりと思ふ、今此著に接して、矧川氏の文、其立證の方法より叙述の昧裁に至るまで、決してラスキンの下に在る遠からざるを認む、獨り彼は語氣頗るふる流暢にして、恰かも春深く花盛なるの時、細流の杳然して平野を横きるか如く、此は文勢更に豪放秋高く風荒きの候、奔流の杳然として、巖崖に激するか如し、双美各一長一短ありと云ふべし、而して風景論中最も誦すべきの節は何れにありや、予輩は寧ろ其第四章に存するを信するなり、泉流の初源を遡り次第に其の進路を叙する所の如き極て精練の筆、他に匹を見ず、予輩は其長きか爲に茲に抄する能はざるを遺憾とす、月ヶ瀬の勝を論する所亦精讀の價あり、思ふに著者の健筆這般の景物を寫する最も適當なるが爲ならむ。

獨り其の瑕疵を求めは、語勢動もすれば急促に失して往々成句たらざるの點に存す、是れ實に著者の一大缺點にして、豪放の極流れて横窟に入りし故ならむ、之を疑ふものあらば、先づ卷首の小言及び卷言の題畫の辭を一讀するに如かず、何れも文章とは言ひ難し、此書多く詩類を挟み、繪畫を添ふ、而も名所圖會等に於けるよりも、其適切なるを擇ひしに似たり、繪畫の多くは嘗て吾人の目に觸れしものたるを憾とすれども、風韻楚々頗る興趣に富む、表紙の畫に至ては濃淡の差を示す能はさりしよりして、疎笨なる平畫と化せしは、尤も此著の風致を損す、著者は更に登山の氣象を振作すべしと主張し、登山の準備方法等を指示するを極めて切なり、又北海道の原人的風景を唱道し、其状景を述ふるを頗る盡せり、共に著者に感謝せざるべからざる所思ふに、此著を繕くもの、此好指針に由りて其の利益を受くるを實に僅少に非ざるべし、著者は最後の餘論三章に於て大に其抱負を發表せり、美術家に對しては、日本風景保護の忽にすべからざる國土絶特のものに寄托せんことを勸告し、内治者に對しては、日本風景保護の忽にすべからざるを説き、地學家に對しては、進て亞細亞大陸地質の研鑽に従事せよと論す、筆鋒犀利觸るゝもの斷ぜざるはなし、殊に臺灣の玉山を、臺灣富士、山東の泰山を、山東富士と改稱し、我富岳に隸せしめんと云ふに至ては、著者の霸氣既に滿清を呑み盡くせるを見る、想ふ著書の筆を擱くに當りて、如何に意氣の千秋なりしかを、

又本誌編輯の後志賀君より日本風景論の第二版も寄贈せらる、訂正する所頗る多く、表紙の畫の如きも亦他の優美なる對州海邊の圖と代へらる、志賀君の如きは過を改め善に進むに聊も吝ならざるの君子たる予輩は之を以て之を知れり

(是れ「日本風景論」初版の批評、故に評中の「第四章」は再版第三版の「第五章」、又評中の所謂第二版表紙の挿畫は、第三版には更に別の挿畫を以てせり)

45
67

11
11

「日本風景論」第三版印刷中、二十八年一月十三日、事を以て常陸筑波郡に行く。途次小金ケ原を過ぐ、冬景清瘦、車上「利根川圖志」を讀む。此間の風色を描きて眞に逼る。想ふ鄙著を批評する者、同じ「ラスキン」の語あり、噫、鄙著の如き固より言ふに足らざるなり、唯だ「利根川圖志」中の此文、眞個にラスキンに超ゆる一等、讀過して絶嘆に堪へざりき。既にして午後五時半、筑波の山色を約七里の外に望む、其色濃厚なる純碧、所謂普魯西亞藍にして光澤は之れに優るもの、惜む「利根川圖志」の能文者として此の山色を寫さしめざりしと。所謂ラスキンに超ゆるもの、茲に在り、左に載出す。

(因に云ふ、此文は安政二年十月、「利根川圖志」著者赤松宗且の友人某の屬稿せし所。) しばしば小金原に入る。許多の人の道、記ふみ見しに野邊に駒ざし遊びて、最面白き由なれど、寒風吹きわたる夕暮なれば、わが乗りたるより外には馬もあらずかの鹿島日記に「ひたる驢脂鹿毛の神馬は今も有りや」など思ひ續け行くに、枯野の景色、緑の松にきほひてろの状いはむ方なし。いかげちのいろに入日のてりちひて、藤繪に似たる松を見しか。野は名残なく枯れわたれり、風に尾花の波かき戦ぐ方も有り、松はさころに合ひてや、高くして上には緑の枝蓋の如く、さし覆ひたりし、夕日の方に遠に富士、峯を見出でたるは、いほすめでたし、天際には驢脂にて一文字かきたらむ状に、平なる間に常の形なから思ひしより、もしく頭の方狭くて、詩にも歌にもいひ盡くすましかり、見る中に雪の如見なされし、もしく頭の方狭くて、詩にも歌にもいひ盡くすましかり、見る中に雪の如ゆく方は、まだ路遠く里もなし、小金の原の冬の夕ぐれ。



内限のる内
 景氣の楽
 なりて以て
 此のうろた
 人れは朝の
 けりたは欲
 せしむる目
 人むるを感
 むるはまや
 費及山にれ
 ず水月其天
 常財花の地
 にわわて主
 買せ買と餘
 物得

水物てふな
 風ほにあり
 月しあてこ
 富天のてき
 貴地景すま
 事ばのの景
 常なのの景
 知らり奢う
 目此をち固
 り飲れやば
 みるま樂に
 鳥食嘗さす
 のへへに世
 始味は俗る
 しはよやの
 み快きくた
 さし物我の
 なさとがし
 れの貴しな

食身みどし
 りのほ其む
 へどく其の
 がきみの知
 てまさしら
 病そみさ目
 起いな未の
 り飲れやば
 みるま樂に
 鳥食嘗さす
 のへへに世
 始味は俗る
 しはよやの
 み快きくた
 さし物我の
 なさとがし
 れの貴しな

凡世がごも
 と外しごさ
 物むたし
 以子し
 ての言た
 へやの心
 類月迷は
 其花を迷
 の樂めなく
 淡でく損
 け山し損
 水てひ
 心人

終見とを
 日風蚤苦
 たをふま
 の意むの
 得るし物
 やわめと
 すすきも
 二み後ら
 のの福福
 失此福福
 なな此類
 くたの富
 てし貴の
 志みの人
 だを人み
 に知は貧
 其賤神は



限りなき楽しみ



貝原益軒

終